



求道



第六號

第二卷

可認物便郵種三第 日六廿月二十年一卅治明
(行發日一圓一月每)行發日一月七年八卅治明

求道第貳卷第六號目次

◎不可思議論	求道	
◎門戸と堂奥		
◎純他力主義		
◎明來闍去	講話	近角常觀
◎一切無礙		近角常觀
◎告白一	實驗	塚本大愚
◎告白二		岡田菊隱
◎告白三	雜錄	求道生
◎法句經の二十節		常盤大定
◎喇嘛僧談		

歎咏

◎行々子

◎机上の花

◎龜井戸の藤

左千夫
甲
同

紹介

◎真言宗綱要◎時代宗教◎印度佛教史綱◎佛教年代考◎靈華集

時報

◎高師佛教會茶話會◎佛教青年會夏期講習會◎夏期修養の好時機◎求道會講話◎求道學舍、第二、第三、求道會講話題

求道學舍

第二求道會

第三求道會

八月 月中 休講

求道

第貳卷 第六號

不可思議論

吾人實驗的信仰の無碍自在なるを味ひ來りて常に自ら最後に仰嘆すらく唯不可思議なる哉と、而して吾人他の道を求むるの
人に對して之を説く、最後に遂に言ふ所を知らず、曰く彌陀の誓願不思議なる哉彌陀の名號不思議なる哉と、既にして道を求
むるの人頗る苦悶の境を脱して身心從容として攝取光明の中に遊ぶ、身は是れ昨日我慢我執の人、心は今日既に觸光柔軟の徳を
漾ふ、是豈不思議と言はずして亦何とか言はむ。此に於てや嘗て自己に於て經驗したる不可思議の實驗は、亦何人も歴々として
之を實驗し、我人に向ふて鑽仰したる不可思議は事實となりて眼前に實現す、此時に當りて不可思議の靈感に溢れ來り
て亦言ふ所を知らず、唯肅然として佛力の現前し給ふを拜し奉りて恭敬なす所を知らざる也。此に於てや親鸞聖人の常に不可
思議を以て佛力を讚嘆し給ふの言語、一言ふべからざる靈感を以て溢れたるを感せずむはあらず。而して「行卷」一冊は正
に是れ言を極めて不可思議の佛力を讚嘆し給ひたるもの、吾人は反覆熟讀其意味の深長なるを仰嘆せずむはあらず。

想ひ見る、親鸞聖人年二十九、初めて吉水の禪房に法然聖人を訪ふて教を受け給ふや、易行の大道を開示して、南無阿彌陀
佛、往生之業、念佛爲本の旨を授け給ふ。親鸞聖人其言の如く教を奉じて佛力の廣大なるを仰嘆して歡喜胸に充ち、渴仰肝に
銘するの時、言語の出づる所を知らず、唯先師の言のまに、之を信受して、一點の私を存せざるは、やがて是れ渾一無雜の金剛
信にあらざるや。親鸞に來きては唯念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよき人の仰をかうむりて信する外に別の仔細なき
なり。嗚呼當時法然聖人の説きたまひし念佛は如何に親鸞聖人の耳に響きけむ、恐くは唯不思議と叫ぶの外なからむ。此一瞬

時は即ち他方攝生の旨趣を實驗して大慶喜心の開發したまひし所、口未だ念佛出て來らざるも既に攝取光明の中に在り、況んや耳に聞き口に誦するに無邊の聖徳識心に攪入す、眞個に是れ不可思議の極に非ずや。行卷劈頭に曰く、大行とは無碍光如來の名を稱する也、此行はすなはちこれ、もろくの善法を攝し、もろくの徳本を具せり、極速圓滿す、眞如一實の功德寶海也、故に大行と名くと、實に是れ信仰問題の根柢にあらずや。

吾人は實驗の信仰を切言す、然れども若し強て我實驗せんと企つるあらば不可也、法然聖人念佛を説き給ふ、弟子之を聞き強て我念佛せざるべからずと執するものは既に自力に陥るにあらずや。若し親鸞聖人の信心をきいて強て我信せざるべからずと執せば亦自力の信に陥らざるなきを得むや。徒らに足に力を加へて立脚地の固からむことを企つることなれば、寧ろ地盤の確固なるを頼みとせよ、徒らに自己内心を鍛鍊して而して後信仰を確立せむと企つるを止めよ、唯佛力の不可思議なるを仰ぐべし。念佛は無義を以て義とす、不可稱不可説不可思議の故に」と云ひ、又「唯誓願を不思議と信し、また名號を不思議と一念佛しとなへつるうへは何條わがはからひをいたすへき、さくわけしりわくるなとわつらはしくおぼせられさふらふらん、これみなひかことに候なり、たゞ不思議と信しつるうへはとかくの御はからひあるべからず候云云」と云ふもの、眞個に是れ不可思議を不可思議と信する實驗を傾け來りて餘蘊なし。故に信仰を實驗せむと欲せば強て實驗せむと企つる勿れ、唯誓願の不思議を仰ぐべし、此の如くにして自然法爾として信仰來る、是即ち誓願不思議に非ずや。

吾人嘗て死刑に處せらるべき囚人に對して佛陀の大慈大悲を説き奉りて嘆異鈔一卷を授く、囚人自己の罪惡を懺悔して偏へに如來の大慈を仰ぎ、毎日二回嘆異鈔を拜誦して運命を不可思議の佛智に托す、彼一點も現世の僥倖を冀望することなく、唯永久の救済を大慈の願力に托せり。予問ふて曰く、嘆異鈔に於ける何れの箇所か最も味深きや、彼答て曰く、所として味深からざるはなしと、既にして數日を経て裁判頓に一變して無期徒刑に處せらる、彼感泣して佛力の益々不可思議なるを嘆じ、嘆異鈔を以て一世の教訓として服膺せむことを誓へり。又人あり中風を病みて口言ふ能はず、身動くあたはず、仰臥七年未だ一日も心中の平安を得ず。余乃ち説きて曰く他を怒る勿れ他を怨む勿れ、他を怒り他を怨む、何の益かあらむ、強て他を怒るなか

らむと企て他を怨むなからむと企てなば、是亦一の苦也、須らく心に深く佛を念すべし、心に念することあたはずむば、口に稱名すべし、口に稱することあたはずむば、心に常に稱名するの念をなせと。忽にして心中歡喜を生し、心常に佛を念す、此に於てや知らず識らずの間に口動きて遂に念佛聲にあはれ、念佛聲にあはるると共に、遂に僅に口言語を爲すに至る。予此等の事實を見聞するに及び吾人は何等の思議をも挾むべからざるを感ずるのみ、吾人は固より一點たも法に對して我執を挿むを得ず、何んとなれば皆是自然に來る所、所謂法の徳の故に爾らしむるものたれば也。此に於てや經卷は實に其文字の如く信すべく、奇蹟亦事實の如く信すべきを感せずむはあらざる也。蓋し佛陀の經文に説き給ふ所、宗祖の釋文に示し給ふ所、一として現前の事實たらざるはなく、自明の眞理たらざるはなし。佛陀何ぞ屈折迂回特に眞理を寓言の下に隠し、宗祖何を形容を以て佛徳を誇張し給ふの事あらむ、觀經の下品下生は洵に適切なる惡人最後の問法にして現世利益和讃は皆是れ文字の如く靈界の事實、現世の利益にあらずや。此に至りて誓願不思議、名號不思議は益々廣大なる德音たらすむはあらず、大無量壽經の最後に曰く當さに信順して法の如く修行すべしと、嗚呼佛說師釋に向て吾人何ぞ一言を挿むべき餘地あらんや、古來の宗教的經驗皆傳ふる如く信すべし、吾人凡小拘々の小智を以て不可思議の佛力を測量するの愚を學ぶ可けんや。拾遺古德傳の耳四郎獲信の因縁の如き實に佛力不思議を實現せるもの、吾人は其文字の靈感を以て満たされたるを拜讀して、感嘆措く能はざるものあり、乃ち文の長きをも顧みず之を引用せむかな。曰く

攝津の國幣島に年來すみはんべる一人のおとこあり、世のひとなつて耳四郎とやいひける、天性もとよりかたましくしてまたするわざもなく、たゞ鳥惡をのみこととして世をわたるかたちとす、あるとき聖人白河の房にてよもすから法談あり、くだんの耳四郎みやこにのぼりてところ、ためらひありくに便宜よかりければ、かの貴房にいたりぬ、縁の下にはひかくれて、ひとのしづまるほどをまちけるほどに、聖人の御房いつものことなれば、凡夫出離の要道、淨土の一門、念佛の二行にしくはなし、その機をいへば十惡五逆四重勝法闡提破戒破見等の罪人、その行を論ずれば千聲一聲いかなる嬰兒もとなへべし、その信をいへば一念十念いかなる愚者もちこしつへし、もとより十方衆生のためなれば、いづれの機かあれ、いづ

れのとものがらかすてられん、十方衆生のうちには有智無智、有罪無罪、凡夫聖人、持戒破戒、若男若女、老少、善惡のひと、乃至三寶滅盡のときの機までみなこもれり、たゞこの本願にまうあひ南無阿彌陀佛といふ名號をさへてんもの、若くは不生者のちかひのゆゑに彌陀如來遍照の光明をもてこれを攝取してすてたまはず、罪あもく、障ふかく、心くらく、解すくならんにつけても、いよ／＼佛の本願をさへへし、そのゆへは彌陀の本誓はもと凡夫のためにして聖人のためにあらずといふ文によりてなりあふくべし、信ずべしなんと、さまざまに易往易行の道理、他力引接の文證みちかきに、こゝろをやすくのたまふ、

是實に惡人正機の德音、絶對他力の秘奧也。我等の心の善きをば善しとして之を恃み、惡しきを惡しきとして絶望の淵に沈めるものは未だ誓願の不思議を知らざるもの也。洵に佛の願力は因果を超絶し、業報も感應せず、一切群生唯彌陀大悲の救濟に洩るゝものなし、果せる哉此不可思議の慈光は遂に鼻惡の耳四郎を照し玉へり。曰く、

耳四郎さらになにのわざもわすられて、みゝをそはたて、聽聞す、こゝろにあもふやう、これほどにわがためみゝよりたうとさことはんべらす、かゝるところにあもひよりけるも、しかるへくて後生たすかるへさにて、佛の御をしへにもやはんへるらん、たゞいまはひいて、かつはれもひさざしつる意趣をも慥し、かつはなをもよくたうとさことをも、とひたてまつらんとれもひつゝ、夜もあけにければ、やをらむなくはひいて、庭上に蹲居す、御弟子達、あやしみて絆のよしをとふ、

耳四郎しか／＼とありのまゝにまふしければ、聖人いであひたまひて宿縁もともありがたしとて、罪惡重障の凡夫の出離、ことに彌陀難思の願力によらずんはかなひがたしとて、手をとりにて慇懃にとささかせたまふ、耳四郎いよ／＼よろこびをなして退出す、そのちふたこゝろなく念佛す、されども生得の報なればひごろのわざすつることなし、たゞたのむところばかり悪業はけしき身なりとも、念佛せば彌陀如來の大慈大悲の因位の誓約をたかへず、むかへたまふとき、し、聖人の御ことばばかりなり、

嗚呼無始已來の罪業凝て氷塊の如し、恰も是れ雪山頂上萬古の氷を積めるが如きもの、幸に佛の慈光の照耀あるにあらざれば

何ぞ和融の時あらむ。然れども一たび佛日の光益を蒙りて罪惡の衆生胸底一たび宿善開發の春に遇ひぬれば、久遠已來の寒氷忽爾氷瀑となりて霖々落來らむとす、床下の耳四郎心自ら安らきて暗涙目に在り、今夜何等の因縁ぞ此の如き無上の法を耳にす、是佛陀引接の恵たらざるなからむやと、懺悔の念既に萌して胸中不可思議の感往來し床下に堪へざらむとす。天明聖人手を執り大慈の涙を泛へて絶對の救濟を説き玉ふ、天下何物か此の如き慈光に接して融和せざるものやある、身は是れ罪惡有漏の器なりと雖其中既に清淨の法水を滌ふ、吾人は是に於てや法水の如何なる器にも充滿し給ふを嘆ぜずむはあらず。古來或は耳四郎か信後生得の報存せしを怪むものあり、吾人は寧ろ生得の報ある器にして此の如き慈光を蒙りたる他力不思議を感せずむはあらず。既に一たび慈光を蒙る、果然轉惡成善の益は名號不思議の力をあらはし來りて絶對的に彼か生得の惡業を滅し給へり。曰く、

かくて年月をふるに、あるときかたへの男、耳四郎が惡事に長したるをやそねみけん、なをちかくむつひける朋達をかたらしめて、耳四郎を害せんとたくむ、酒をくみ、盃をめくらしてしむければ、耳四郎沈醉して物をひさかつき、先後をわきまへず臥にけり、そのときかたさかたなをぬきつゝうへにかつきたるものをひきのけてみるに、耳四郎には、あられて、またく金色の佛體なり、しかのみならず、出入のいきのと、すなはち南無阿彌陀佛／＼ときこゆ、こゝにかたさ奇異のあもひに住して、まつ劔をさめて、つら／＼これを案するに、年來のあひた、行住坐臥時處諸縁をさらはず、念佛しつるゆへに、

この相現するにこそと、いみじくたうとくおぼえて、隨喜のあもひをさきとこなきあまり、しは／＼これをおとろかすに耳四郎こゑにつきて睡眠たちまちにおとろき酩酊惺悟す、そのときかたさの男、いふやふ、なにをかかくしきこえん、しか／＼なにかしのぬしか、かたらひはんへりつれば、はかなく、そこをうしなひたてまつらんとたはかりつるに、このすかた、金色の佛像とあらはれ、そのいきの呼吸しかなから念佛のこゑときこえつれば耳もあやに、目もめづらかにおぼえて、かつは謝し、かつはたうとまんかために、左右なくちとろかしつるなり、われもとより汝にむかひて遺恨なし、たゞちろかにかたらひをえつるはかりなり、さら／＼いさ／＼とちもふことなかれとて慚愧のあまり、やかて誓をさりとみせにけり、これを

きくにいよ、信力強盛におほえて耳四郎も、もとどりきりてけり、二人こゝろさしを二にして、かたはらに庵しめつゝ、しつかに念佛して、つゝに素懐をとけにけり、是世人の所謂奇蹟なるものにあらずや。然れども奇蹟必しも奇ならず、固より人よりして之を見は洵に奇、然れども佛陀より之を見は當然の事、既に不可稱不可説不可思議の名號を稱ふ、奇蹟不可思議は人力より来るに非ず、全く佛力より来る。若も之を目にし之を耳にするもの懺謝の心を起して、佛智海に歸入し、耳四郎亦信力強盛におほえて誓と共に年來生得の惡習慣を打破し來りて、此に清淨無垢の新生涯に入ること、是寧ろ現前の不可思議にあらずや。蓮如上人弟子の六字名號焼けて六體の佛になれる事不思議なりと語りしかば上人曰く、それは不思議にてもなきなり、佛の佛に御なり候は不思議にてもなく候、惡凡夫の彌陀をたのみ一念にて佛になるこそ不思議よと。嗚呼名號不思議誓願不思議の力によらずむば何ぞ山賊海賊強盜竊盜放火殺害殊に被害にをきては幾千万といふを知らざる耳四郎が心中に能く清淨信心の花を開かむや。苟も法を説くもの一點の自己の力を認むる勿れ、皆是無限大慈の大威神力の實現まします也、看よ我等既に三業造罪にして一切悉く妄念也、造るも造らざるも罪體也、思ふも思はざるも妄念也、既に罪體妄念の人、豈他の罪體妄念の人を化せんや。吾人心中若し無上寶珠の回向を蒙らずば何ぞ自他の濁惡垢穢を清めむ、唯眞實の根本は佛陀に在り、清淨の源泉は名號に在り、此に至りて眞實行の念佛、名號不思議の自在神力は吾人信仰問題の大地盤也。宜哉、親鸞聖人行卷に於て疊々經論を引用して名號不思議を讚嘆し、最後に之を名づけて一乗海と云ひ、涅槃經に所謂實諦とは一道清淨にして二あるなしと稱するも此如來清淨眞實に外ならず、華嚴經に一切無碍人一道より生死を出つと説くも畢竟念佛無碍の一道也と達觀すること。釋尊一代の説教唯此不可思議海を説かむが爲めなり且つ海と云ふは久遠より已來、凡聖修する所の難修難善の川水を轉じ、逆誘闡提恒沙無明の海水を轉じて、本願大悲智慧眞實恒沙萬德の大寶海水となる、之を海の如しと譬ふ、誠に知ぬ經に説きて煩惱の水解けて功德の水となるが如しと、是實に耳四郎の事實に於て歴々見るべきにあらずや。嗚呼「形をみれば法然詞を聞けば彌陀の直説」親鸞聖人感泣して法然聖人にすかされまゐらせて、念佛して地獄に落ちたりともさらに後悔すべからず候と云ふもの良に以ある哉。親鸞聖人此不可思議海を嘆して言の出つる所を知らず、念佛諸善比較對論して四十七對を數へ、最後に圓融満足極速無碍絕對不二の教也と斷言し、又此不可思議海を信する心機につきて十一對を數へ、最後に金剛信心絕對不二の機也と斷言し、言を極めて絕對不可思議海を嘆息して其盡くる所を知らず、吾人最後に聖人が嘆息の詞を畧するに忍びざる也、曰く、

敬て一切往生人等に白さく、弘誓一乗海は無碍、無邊、最勝、深妙、不可説、不可稱、不可思議の至徳を成就し給へり、何を以ての故に、誓願不可思議なるか故に。悲願は喩へは大虚空の如し、諸の妙功德廣無邊なるか故に。猶大車の如し、普く能く諸の凡聖を運載するか故に。猶妙蓮華の如し、一切世間の法に染せられざるか故に。善見樂土の如し、能く一切煩惱の病を破るか故に。猶利劍の如し、能く一切憍慢の鎧を斷つが故に。勇將の幢の如し、能く一切の諸の魔軍を伏するか故に。猶利鋸の如し、能く一切の無明の樹を截るが故に。猶利斧の如し、能く一切の諸苦の枝を伐るか故に。善知識の如し、一切生死の縛を解くが故に。猶導師の如し、善く凡夫出要の道を知らしむるか故に。猶涌泉の如し、智慧水を出して窮盡なきか故に。猶蓮華の如し、一切諸の罪垢に染まざるか故に。猶疾風の如し、能く一切諸障の霧を散するか故に。猶好密の如し、一切功德の味を圓滿せるが故に。猶正道の如し、諸の群生をして智城に入らしむるか故に。猶磁石の如し、本願の因を吸ふが故に。閻浮檀金の如し、一切有爲の善を映奪するか故に。猶伏藏の如し、能く一切諸佛の法を攝するか故に。猶大地の如し、三世十方の一切の如來出生するか故に。日輪の光の如し、一切凡愚癡闇を破りて信樂を出生するか故に。猶君王の如し、一切上乘人に勝出するか故に。猶嚴父の如し、一切諸の凡聖を訓導するか故に。猶悲母の如し、一切凡聖報土眞實の因を長生するか故に。猶乳母の如し、一切善惡の往生人を養育し守護するか故に。猶大地の如し、能く一切の往生を持するか故に。猶大水の如し、能く一切煩惱の垢を滌くか故に。猶大火の如し、能く一切諸具の薪を燒くか故に。猶大風の如し、普く世間に行して碍ふる所無きが故に。能く三有繫縛の城を出て、能く二十五有の門を閉ち、能く眞實報土を得しめ、能く邪正の道路を辨へ、能く恐痴海を竭し、能く願海に流入せしむ、一切智船に乗して、諸の群生海に浮ぶ、福智藏を圓滿し、方便藏を開顯せしむ。良に奉持すべし、特に頂戴すべし也、乃至斯乃ち誓願不可思議一實眞如海にして、大無量壽經の宗旨、他力眞宗の正意也。

層々譬喩を重ね、疊々佛力の無窮を嘆じ玉ふ、一々の譬喩何れも實驗の味たらざるはなく、一々の讚嘆絕對の威力を開顯せざるなし。終に言盡きて意盡さず、仰げば彌々高く、鑽れば彌々堅じ、最後に頌を以て佛恩の深遠を讃じ玉ひしもの實に是れ正信念佛の樹にあらずや。此に至りて吾人亦言の出つる所を知らず、不可思議を不可思議と信するの外あらざる也。茲に謹みて偈頌の結句を拜誦して筆を投ぜむ哉。曰く、

弘經の大宗師等、無邊の極濁惡を救濟し給ふ。
道俗時衆共に心を同うし、唯斯高僧の説を信すべし。

門戸と堂奥

家あり廣くして且つ深奥なり、何人をも容るべし、而も之に入る必ずや一の門戸よりせざるべからず、若し一身にして同時に數多の門戸より入り入らむとするものあらば如何、左顧右往恐くは遂に其中に入る能はざらむ、古來信仰を語る唯一門ありて通入すべしと言ふもの良に以ある哉、

禪と信仰とを融和し、佛教と基督教とを併へ説くか如き遂に人をして岐路に迷はしむるに終らむ、自力の極端と他力の極端たとひ其堂奥に於て相會すとすも人は同時に東門と西門とより入るべからず、佛教と基督教と門相似たりとするも或は其家を異にするなからむや、

宗教の要は相對の大世界を脱して、絕對の家に入らしむるに在り、門戸の檢究にあらずして目的は堂奥に達するに在り、一たび門戸を通りたるものは歴々として其徑路を實驗し、終に堂奥に達したるものは歴々として四方の門戸を望むべし、故に一たび信仰の門より入りたるものは禪の見地了々として

味ふべく、佛教の門を通りたるもの亦基督教の實驗解すべし、然れども信仰の門より入りたるものは遂に禪の門を説くべからず、何んとなれば自己が通過せし道にあらざれば也、若し強て之を説かんか、たとひ禪の言語を弄するも實驗は信仰の道に外ならず、佛教の門を入りたるものは遂に基督教を説くべからず、其徑路相似たりとするも其堂奥必しも同じからざれば也、強て之を併せ説かんか、畢竟一の言語を以て他を説くに過ぎざれば也、

禪の曰く念佛は一種の考案也、念佛者肯んぜず曰く念佛は不可思議の徳號也と、遂に禪の了解する能はざる所也、佛教徒曰く、基督は人にして絕對を實驗せる者也、基督教徒曰く否基督は神の子也と、遂に吾人佛教徒の了解する能はざる所也、

遮莫、一旦絕對の境に達して古聖賢の言を味ふ、生來始めて古聖賢と膝を接して相語るの感なくむばならず、又後より來る人を見る、中庭に坐して其到着を待つが如き感なくんばならず、況んや其門を同ふせるに於てをや、一たび相會して手を執りて其徑路を語る、旅亭燈を剪りて過程を語るの感なく

純他力主義

七月十五日は孟蘭盆會を行ふこと我朝の習慣也、孟蘭盆經によるに曰く、目連其亡母の餓鬼中に生して飲食を得ず、皮骨連立するを見て、悲哀して鉢を以て母に餉す、母之を食せんとするに火炎となりて燃上す、目連號泣して馳せて佛に訴ふ、佛言く汝一人の力奈何とすべからず、汝孝順の聲天地神祇を動すと雖奈何ともすることなし、吾今汝が爲めに救濟の法を説かん、佛目連に告く七月十五日僧自恣の日七世の父母及び現在の父母厄難のもの、爲に十方大徳の衆僧を供養すべしと、佛衆僧に勅して施主家の爲めに咒願して食を受けしむ、目連之母之が爲めに餓鬼の苦を免るを得たり、目連曰く弟子の母三寶功徳の力を蒙るを得たり冀くは未來世一切佛弟子父母長養の慈恩を報するの例となさむと、
蓋し己上の事實は深く味ふにあらざれば自力他力天地宵壤の別を生ぜむ、若し目連自己の力を以て救濟し得べくむは飯を亡母に餉するの時何ぞ炎上するあらむ、一切衆生業報あり、自己の力を以て他を救ふべからざる明也、故に三寶の力によりて之を救濟せらるゝを得たり、若し三寶の力を認めずして

んはあらざる也

三世間滔々宗教に關する文字多し、多くは門戸の周圍に彷徨して、遂に堂奥の實驗を語るもの極めて稀なり、近時伊藤證信氏等無我苑同朋の「無我の愛」、綱島梁川氏の見證の文字の如き頗る吾人の心絃に共鳴するものあるを覺ふ、後者は未だ多くを見ずと雖、教權信條に拘泥し安き基督教中に於て實驗の閃を認む、實に空谷琵琶を聞くの感あり、前者に至りては全然相對の城廓を破壊して、絕對無我の經驗を説く、眞個に是れ吾人が宗教的同朋也、而して儒佛耶、悉く自家火寶中に鑄冶して之を説く、文殊大地を見るに悉く藥草たちざるはなく、親鸞聖人の眼中に映したる一代經は誓願一佛乘たらざるはなし、吾人深く之を了解す、然れども絕對に入る必ず一門よりせざるべからざることも亦自ら經驗せられたるが如し、他の誤解固より念とするに足らざるも希くば他をして二兎を追ふの誤に陥らしむるなからむことを、欣喜の餘一言征途を祝す、

前記の如き文章は、
其の目録は、
其の目録は、

單に目連か佛及佛弟子を饗するの力によりて救濟せしとせんか、是既に自力なるもの、寧ろ此等の食を以て母に餉するの簡易なるに如かず、しかるに目連直に母に與ふべからずして三寶の力によるものは是即ち佛教の純他力主義をあらはすもの、原始佛教既に三寶已外に其力を認めざる也、後世施餓鬼水陸大齋の事あり、遂に食物を以て直ちに餓鬼に施し、若しくは精靈に供養すと考ふるに至る、是本來孟蘭盆會の意にあらざる也、

親鸞聖人此に見る所あり、佛教本來の思想三寶已外の物に事ふるを禁するを公言す、般舟經に曰く、自ら佛に歸命し、法に歸命し、比丘僧に歸命せよ、餘道に事ふることを得ざれ、天を拜することを得ざれ、鬼神を祭ることを得ざれ、吉良日を見ることを得ざれと、親鸞聖人三寶已外に其力を認めざるもの、恰も目連の母三寶の力によりて救はるゝと其意を一にするものと謂つべし、目連が十方大徳を供養したるが如きは畢竟三寶歸命の意義なるもの、毫も自己の力を認むるにあらず、此に至りて自己の力を以て父母孝養をなすにあらずして皆悉く佛陀救濟の力によりて初めて父母をも救ふべく、兄弟をも救ふべく、過去七生の父母をも救ふべく、乃至一切衆生をも救ふべ

講話

明來闇去

(求道學舎日曜講話)

近角 常觀

今日の題は「明來闇去」と出して置きました。明來闇去とは文字の通りで明が來りて闇が去り、光明が到りて闇黒が去ると謂ふ意味である。此の語は御承知の通り經文中に出て居るのであるが、信仰の味が如何にも能く此の一語に現はれてあると思ふ。私は從來色々の場合に遭つて色々と味はせて貰つて見るに、誰ても信仰に入られる時は皆此の明來闇去で、何時でも光明が來りて闇黒が去り、佛陀の慈悲が解かつて從來の苦が頓に去るのである。勿論此の苦悶が去ると光明が頂けると殆んど同じ瞬間の事であるが前後の區別など明かに出来るのでは無い。併し信仰の味から申せばどうしても光明が來りて苦悶が取れるので、苦悶が去つて光明に入ると謂ふよりも、光明が來りて苦悶が自然に去ると謂ふ方が適當であるやうに思ふ。いつも能く申すのであるが實際我々が苦しんで居る間は眞實自分が悪いなどは決して思へるもので無い、苦しみのもやはり自分を善いと考へ、自分の力を間に合はし度いと思ふもの故苦しむのである。夫れて此の苦悶の間は何んと謂つても自力が勝つて居るので、眞の光明はまだ見えて

し、而して是天徳供養の力にあらず、行者回向の力にあらず、全く歸命三寶の力也、絕對佛陀の力也、純粹本願の力也、如來回向の力也、自然法爾の力也、
嘆異鈔に曰く、親鸞は父母孝養の爲めに、とて念佛一遍にて、もまらしたること、いまだ候ばす、そのゆゑは一切の衆生は皆世々生々の父母兄弟なり、いつれもたゞこの順次生に在りて佛になりてたすけ候べきなり、わがちからにてはげむ善にても候は、こそ念佛を回向して父母をもたすけ候はめ、たゞ自力をすて、いろぎ淨土のさとりをひらきなば六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり、

佛陀大主義

自然徳風、除起微動、其風調和、不寒不暑、温涼柔順、不運不疾、吹諸羅網、及衆寶樹、演發無量、微妙法音、流布萬種、温雅徳香、(大元量壽經)

居無いのである。處が其中に一點何處かに光明が見えて下さると、從來の苦悶は忽ち何處かへ消えて仕舞ふ、同時に自分の悪い事も眞實身に知れて來る。どうも此の信仰の事計りは何の點から頂いても難有い。夫であるから罪惡觀と謂つてもこの苦悶の状態に在る間は矢張り眞の罪惡觀には成つて居らぬので、寧ろ御慈悲が解かつて始めて眞の罪惡觀も起つて來るのである。私は常に信仰の經驗とか實驗と謂ふ事を能く申すのであるが、併し經驗とか實驗とか謂ふと動もすると早く苦を去り度いと謂ふ風に思ふ事が多い。全体我々に苦悶の起るのは佛陀の御慈悲に氣が就かぬからである、現在我々は非常なる佛慈を受けて居る、處が自分で其の事に氣が就かぬ故に自分獨りて色々と苦しんで居るのである。一旦此の慈悲に氣が就いて見ると今迄の煩悶は頓に去つて仕舞ふ。丁度我々の有様は水中に居て水を求め、空氣中に在つて一生空氣を呼吸しながら之に氣が就かず、尙ほ空氣を求めむとして苦しんで居るやうなものである。一度此の點に氣が就くと自分は長々の間空氣を呼吸して居つた、御慈悲に浴して居つたのだと解かつて來る。從來苦しむ感じたのは、自分が現在此の御慈悲を受けて居る事に氣が就かずして、此の上別に何物かを得る事のやうに思つて居つたからである。斯くなるも信仰を得るなど、別に六かしく際は立て、謂は無くても自然と難有く成つて來るのである。例に於て一度此を拜讀し奉る事とする。偈で今日の題に最もふさはしきは口傳鈔に出てある親鸞聖人の御言葉である。例に於て一度此を拜讀し奉る事とする。無碍の光曜によりて无明の闇夜はる事。本願寺の聖人親

變あるとき門弟にせめてのたまはく、つねに人の知るところ、夜あけて日輪はいづや日輪いで、夜あくや、兩篇な人達如何かすると云々。うち任かせて人みな思へらく、夜あけて後日いづとこたへまふす。聖人のたまはく、しからざるなりと。日いで、まさに夜あくるものなり。うの故は日輪まさに須彌の半腹を行度する時、他州の光り近づぐに、ついでこの南州あさらかなれば、日いで、夜はあくと言ふなり。これ譬へなり、无碍光の日輪照觸せざるときは永々昏闇の无明の夜あけず。然るに今宿善とき到りて不斷難思の日輪、貪瞋の半腹に行度する時、无明やうやく闇みはれて信心たちまちに明かなり。然りと雖も貪瞋の雲霧かりにおぼふによりて、炎王清淨等の日光現はれず。是れによりて煩惱障眼雖不能見とも釋し、已能雖破无明闇ともたまへり。日輪の他力いたらざる程は我と无明を破すといふ事あるべからず。无明を破せずばまた出離其期あるべからず。他力をもて无明を破するが故に日いで、後夜あくと言ふなり。是れさきの光明名號の義に心なきと雖も自力他力を分別せられたために法譬を合しておぼせごとありき云々。

此の味ひは實に難有い。我々は自分獨りて色々腹を立て愚癡を思つて苦しんで居るのであるが佛陀はいつも同じく我々の内心を照して御出下さる、其の有様は丁度日輪の光りを受けながら夫を仰がざるが如くである。日輪の光りが来らずしては何時迄立ちても夜のあける事は無い。若し自分の力で暗が取れるならば光りは要らぬ、我々は永久自分の力では闇を離れる事が出来ぬ故に佛陀は光明を以て我々を照し我々の闇

黒を破つて下さるのである。佛陀の御力を以て闇黒を破つて下さる故に日輪出て、闇が去ると謂ふのである。光明が来りて暗去ると謂ふも、暗去りて光明が来ると謂ふも、一寸聞くと同じ様であるが信仰の味から見ると非常に違ふ。亦實際信仰の實例に就いて見ても左様である。毎々申す彼の囚人の事であるが、囚人の中でも殊に信仰を慕ふのは死刑の人に多い。どうも生命賭けの人は違ふと見えて死刑の人が信仰に入られる事、丁度是て三週間の間續く、私の參るのはいつとも土曜日であるが、家を出かける時は唯何氣無しに出で行く、行つて見るといつも意外の人が信仰に入つて居る爲めに却て私の方が感化を受けて歸つて来る、斯く謂ふ事實が丁度是て三週間續いた。是等の人は到底人の説論とか義理とか、夫れ位の事て能く成れる人では無い。多くは皆三拾年三拾年或は強盜とか或は殺人とか、何れも恐ろしい事を計り遣つて来た人達である。此間も其の中の一人が自分の從來の経歴を書いた物がある、皆て六冊あるが私は其中の一冊だけ讀んで實に驚いた。自分では餘程善き事のやうに書いて居るも、其の悪事と謂つたら實にひどい遣り方で、人間の智慧など、謂ふ點から見れば、到底我々などの思も及ぶ處で無い。勿論此等の人の中には極正直一刻の人もあるが、先づ夫半は悪い方の人が多いのである。處て私は夫等の人に對しては、何と話をせずと謂へば唯佛陀の慈悲の偉大なる事を語る計りである。或は歎異鈔を與へ或は信仰の餘瀝を渡して、是れを親鸞聖人の事、自分の信仰上の實驗、或は耳四郎の事など色々聞かせて歸つて来る。夫れから次の週に行つて見ると今申した様の有様で、ま

だ私が何とも謂ひ出さぬ先きに却つて向うから自分が悪かつたなど語り出す、丸て從來とは逆まである。どうも此の佛陀の事ばかりは我々人間の計ひでは何とも謂ふ事が出来ぬ。一例を話して見れば近頃の事であるがさる監獄に於て皆んなの困り者になつて居つた非常な亂暴の人がある。處が其人がふとして自分の手拭を失つて非常に腹が立つた、其處で自分に氣が就いて見ると、自分は今迄社會に在る時何を爲て来たのか、人の物を取つてばかり居つたては無いか、自分は僅か手拭が一筋失へた位で夫れ丈けに腹が立つ、まして盗まれた人々は如何程に腹が立つたであらうと思ふと忽ち從來の非が知れたと言ふ様の人もある。亦先程一寸申した六冊の経歴書を書いた人の如き斯く謂ふ事を言つて居る。大山大將は自分の部下を誡めて寢鳥を打つてはならぬと話された相である、あれ程戦争をやりあれ程澤山の人を殺した大山大將ですら斯く謂つて居られるに、私は一體何を今迄爲て来たのか、人の安眠中に踏み込んで人ををひやかし物を取るを職と爲て居つたのである、實に私は悪い事を仕て来たものである云々と自分から言つて居る。全体が先づ斯く謂ふ調子で、何か、御縁になり一點自分の非行に氣がつき始めると夫よりづら、と眞面目にかへられる。實に不思議と謂ふの外は無いので、先日亦斯んな例がある。此人は或る事件に關係して此處へ来て居られるのであるが其妻子が面會に来た、自分の妻子の顔を見ると俄かに關係者の妻子や親の上か氣の毒になつて、何故自分は彼の時彼の人の悪事を止め無かつたか、彼の人の妻子や親は何程自分を恨んで居るだらうと氣が就いた、すると一時に從來

の間違が知れて来たと言ふのである。凡て斯く謂ふ有様で、一寸の動機で一點光りが映し込むと凡てが皆明るくなる、例へて見れば雪が深く積つた處へ一度日光が到りて下層の處が少し溶けかける、すると忽ち全體がなだれ落ちて融けるが如く、一點佛陀の光明が宿つて下さると前後左右一時に明るくなつて来るのである。私は唯フン々々と聞いて居る計りて、何故か、る貴い心が起つたものか殆んど解する事が出来ぬ、念珠を取つて恐れ入るより外無くなつて来る。考へて見ると實に不思議に耐えぬ、今申した亂暴者の如き唯一度佛陀に縁を結んだ丈けて三年己來の亂暴が僅か一ヶ月の間にすつさり様子が代はつて来る、今では殺される間際に迫りながら平然として文字の稽古を仕て居ると謂ふ有様である。實に日輪出て、夜が明けするので、佛陀の慈悲と謂ふ事一點胸に映し込めば皆斯くの如く暗は一時に去るのである、佛陀の慈悲の御力はたゞ不可思議と申すより外は無い、是れ皆な私の申した話に力があるのでは無い、佛陀強縁の御力である。親鸞聖人はたとひ聖教を山野に捨て、置くと、其處の有情群類が其聖教に救はれて悉く其益を受くると仰せられた。亦自分は實に淺間しき身で智も無く徳もなく到底有情を利益する事は出来ぬが、袈裟は三世佛解脱幢相の靈服であるから之を着用して魚肉を食せば袈裟の徳用で魚類が救はれるだらうと思つて之を着けて魚肉を食するとも仰せられてある。此等の人々は、私が話した事は少しも間に合つて居らぬが、唯其れが動機となつて投げ込まれた一點の佛縁で遂に斯の如き著しき變化が起つたのである。信仰を得るなど、聞けば實に六かしいが決し

て、そんな六かしき事では無い、親鸞に於てはたゞ念佛して彌陀に助けられまいらすべしと善き人の仰せを蒙りて信ずる外に別の子細なきなり。唯是れ丈けである。明かに見れば見る程彌々心易い事である。自分で経験し實驗し其處で始めて出来る。謂ふそんな六かしき者が信仰では無い。自分は氣就かず居つたが、昔より御照し下されて有つたか、實に難有いと氣が就くと共にもう罪障などにはかゝらぬ様になり、こゝに安心の歡びをも頂くのである。翻つて從來の苦悶を思ふに今はさながら昨夢の如して、丁度夢の間にもとして目が醒め、今のは夢であつたかと思ふ様の感である。私は其囚人などに一々如何な氣持かと言ひて見るに、皆目か醒めた様の感である。謂つて居る。處が此處に出る迄は何を謂つても皆な夢中の仕事に過ぎぬ、或は自分で苦を去り度いと勉め、或は内心で種々と工夫して、今一步で目が開く様に迄思へるが凡て皆夢中の仕事である。其の極に至つて遂に自分の力では到底闇を去る事が出来ぬと氣が就き、翻つて空を仰ぐ時始めて大慈光が解かるのである。信仰を得るなど、謂へば何か或る時期が有る様にも思へるが、後より思へば決してそんな時期などの有るものでは無い。昔より御照しを受けながら今迄知らずに迷つたのは誠に申譯が無いと思ふ時已に身は光明の中に居つたのである。

只今茲に持つて居るのは能く御話する塚本君の書面である。度々申すが今迄私の出會つた中で此の塚本君程不得要領の人は無かつた。其塚本君が斯る立派なる信仰に入られるのだから、到底信仰の事は我々に解る事では無いのである。始終

つて居て下さるのである。斯くなる何の點が難有いと謂ふ事は無い前後左右皆な一時に難有くなつて来る。私は死刑の人などに歎異鈔の何處が難有いかと聞いて見たら皆んなが揃つて何處も彼處も皆な難有いと謂つて居る。死ぬか生るかの瀬戸に臨めば誰でも能く感ずると見える。亦先達でも萬一間違が有つてはならぬと思つて或一人は對し「一體どう思つたのか」と尋ねて見た。すると唯「はい」と答へた丈けでもう泣いて仕舞つてる、真に不思議のもので佛陀が難有いと一度氣が就くと何處も彼處も一邊に明るくなつて仕舞ふ。誠に念佛者は无碍の二道也で、一つも滞る處が無い、右を見ても、左を見ても、何を聴いても彼を聴いても唯歡びとなつて来る。苦悶が何うであるとか、罪惡觀が起らぬとか謂つて居る間はまだ中々廻はり遠い。親鸞聖人が法然聖人の一言で直ちに安心の道に入られたのも全くこの味ひである。法然聖人は何も六かしき事は一も仰せられぬ、唯三言南无阿彌陀佛の念佛の御力で助かるのだと仰せられた夫れ丈けである。其一刹那に親鸞聖人は「あゝ難有い」と受けられた、是れが親鸞聖人の信仰の全體である。夫れで信仰と謂ひ、念佛と謂ひ信心と謂ひ、決して色々の事が有るのでは無い、要するに廣大の慈悲是れ一つである、日輪出で、夜が明ける事である。更に適切に申せば人が信仰を得るには決して自分の力を用ゐる可きで無いと言ふ事である。翻つて佛陀の御力を仰いで見れば佛陀強縁の鎖は既に昔から我々の上に繫つてある。此強縁の御手廻はして果遂の誓ひの故に我々は自然に信仰に這入らざらむとするも得ぬのである。此の點から言へば寧ろ信仰を得無いのが

私の處へ來てはいつも不得要領の事計り謂はれる、或は信仰が理窟でゆかぬ譯は無いか、或は福鳥少將がえらいとか、或は補正成は理想的の人物であるとか、殆んど譯の解からぬ人であつた。處が最後にふとした動機で自分の居場所に就いて偶然不平を洩された。其處で私は「夫れだから貴君はいかぬ、到底我々は人生上の物で安心の出来る事は無いのである。夫等人生上の物が皆盡きて人生の力の了つた處に佛陀の御力が顯はれて下さるのである。是れ丈け申したのである。其時何心に止まつて初めて同君は眼を醒されたのである。其時何故今迄自分を叱りつけて呉れ無かつたかと恨んで歸へられた位であつた、如何にも同君の堅固なる信仰が、能く書面に溢れてある故讀み上げて見やう。(別項参照)此の塚本君など實に明來開去で、一點佛陀の光明が映し込ひなり何事も皆解かつて來たのである、もう佛陀の慈悲の外に何も無い、是れ體に日輪出で、夜があけたものである。是が始は相手に成つて居れば切りの無い、苦しみもせず唯彼是れ謂つて居つた其人の手紙である、手紙全體が慈悲と歡喜の外何物も無い。先に申した口傳鈔の御示しは即此處の味ひで、例へば暗黒中何處にても一點の穴があき光明が映し込めば一室全體が明るくなる様なものである。我々は平生名聞利養貪愛瞋憎の雲霧に蔽れて久しき間佛日の存在を忘れて居つた。もうして自分の理性とか自分の力とかを、色々間に合はせやうとして苦んで來たが結局夫等も消滅して仕舞つて萬事窮まつた極、一つ佛の慈愛に氣が就いて貰つて見ると今迄彼是れ苦しんだは實に一場の空事であつた。佛日の御照しは今も昔にかはらず我々の上に下

不思議と謂はねばならぬ。思ふで見れば我々の此の穢き貪瞋の胸の中へ如何にして斯る貴き歡喜の情が湧いて來たものであらうか、無論自分の力で出來たものではない、夫れがと言つて天地より生じたものでもない、唯彌陀の誓願不思議と申す外は無いのである。去りながら今日に至る迄此の強縁の御慈悲を知らなかつた我々こそ如何にも不思議である、勿體無い事である。自然と此處へ氣就いて來れば始めて眞實の罪惡觀も起つて來る様になるのである。此の強縁の誓願の不思議話しが段々切が無しに成るが後より御出になつた方もあるから今一つ口傳鈔の御文を拜讀して見度い。これは前に拜讀した御文の畢りに有る光明名號の章である。此の章の意を略して光明名號の因縁といふ事。十方衆生のながに淨土教を信受する機あり、信受せざる機あり、いかにとならば大經のなかに説くが如く、過古の宿善あつたものは今生にこの教にあふてまさに信樂す。宿福なきものはこの教にあふて雖も念持せざればまたあはざるが如し。欲知過去因の文の如く、今生の有様に宿善の有無あきらかにしりぬべし。しかるに宿善開發する機のしるしには善知識にあふて開悟せらるべきとき、一念疑惑を生ぜざるなり。その疑惑を生ぜざることは光明の縁にあふが故なり。もし光明の縁もよほさずば、報土往生の眞因たる名號の因をうべからず。いふことは十方世界を照曜する無碍光遍照の明なるに於ては、無明沈没の煩惑漸々にとらけて、涅槃の眞因たる信心の根芽わづかにささずとき、報土得生の定聚のくらゐに住す。或いはちこの位を光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨ともと

けり。また光明寺の御釋には言以光明名號攝化十方、但使信心求念とものたまへり。しかれば往生の信心のさだまることはわれらが智分にあらざる、光明の縁にもよほしをたてられて、名號信知の報土の因をうとしるべしとなり。これを他力といふなり。

此れ亦親鸞聖人が直々の御物語りである。名號は信心の種ねてあり、光明は信心の縁である、或は名號は父て光明は母であると言ふ譬へもある。此れも全く前の御文と同じく明來開去の意味で、全然理を超絶した味ひである。自分の方では唯人生上の事のみを心に取られ彼是れ心配計り爲て居るが、其間にも佛陀の光明はちも變り無く御照し下されて居る。そうして漸々照されてゆく中に、終に名號の報土の眞因が何時と無く自然に開發して下さる、丁度前より度々繰り反す親鸞聖人が法然聖人の御前に於て「信する外に別の子細なきなり」と御決定あつたが如く、唯何氣なく名號を稱へて難有いと氣就く時信仰が確立するのである。而して二度光明に接し奉つて見れば是れ一ツて萬事が皆な動く事となる、一々例を擧げて行けば際限が無いが、是れは亦或る他の監獄に於ての事であつた。已前より佛法に心懸けの有つた一人の囚人か何故か監房内で他の囚人とかが合はぬ、別に恨まれる譯は無いの先方が恨んで来る。或日の事遂に先方は仕事場に於て劍を振つて切りつけ様とした。其處で其囚人は仕方が無く唯手を合はして佛を念じて居ると、どうしたのか先方が劍を下して行つてしまつた。併し斯う謂ふ有様であるから私は何としたりば善からうかと私に尋ねられた。夫れで私は「成る程御前の

謂ふのも最である、夫れでは相手を恨む思も起るであらう。去りながら我々の計ひ心で善いとが惡いとが左様の事を兎や角思ふ可きで無い、唯佛陀を思はして貰ふのである。現に御前を切らうと爲た時でも御前が佛陀を思はして貰つて相手になら無かつた故に向ふても去つたのである。今後も亦其の如く専心佛陀を思ふて居るがよい」と話して夫から耳四郎の話を聞かせた、耳四郎の話を聞いた時は身体中が寒くなつたと謂つて居た。其の次の週に行つて見ると今度は全然態度が改まつて居た。番を爲て居られる方が是非に遇つて遣つて呉れとの事で會つて見ると、念佛やとか親鸞聖人やとか少し六かしい處は一ツも解から無いがたゞ廣大の不思議を喜んで居る。色々聞いて見ると其後になつて前に恨みを抱いて居つた相手はどう思つたか人を以て詫びて來たと謂ふ、そうして其の男も何事も無く濟んだと言ふ事である。かく佛陀光明の御催しで一點大慈悲が解かつて來ると自然と皆な明かに成つて來たのである。此處になると私とて囚人として決して一寸の相違も無い、喜ぶ御慈悲は少しも變はりが無いのである。二十年三十年長々の重荷を下して是れ程樂の事は無い、朝夕に此の御慈悲を仰いで銘々の仕事を爲る、まことに樂しい事である。此後一旦光明に接してからは雲霧の下に暗が無い、眞に限り無きの歡びである。今日の話しは殊に前後も調はず極めて無秩序の談となつた、併し態と順序無しに聴いて頂いた方が可いかとも思ふ。考へて見ると愚入で文字も知らぬ様の人々が最も御慈悲を喜ばれる人である。さう謂ふ人が何時の間にか皆な信

心に入つて行かれる。私など或は雜誌に書き或は話を致し却てよろしく無い、寧ろかゝる獨りて譯知らず喜んで居られる人の方が眞の信仰生活である。

一切無礙

（第二求道會講話）

本日是一切無礙といふ題を出して置きました。一切無礙と言ふ味はどうかと言ふに、一口に言へば所謂絶對の味、總て何の礙もなくなりたるを言ふ。猶分り易く言へば、この人生に生活するに吾々は始終さわりをもつて居る、信仰の光を得ない間は人生皆さわりである。人間はさて如何に生活すべきか人生に於ける一のさわりである、名譽といふ事がそろそろ氣にかゝつて來るは一のさわりである、人は學問を爲なければならぬといふて考へて居る是學問のさわりである、人生に於ける總てのものとしてさわりならぬものはない。そのさわりによりて種々を寄托して心身を苦しめて居るのである。それはどうかと言ふに、たとひ外の人より見て成程眞面目な事も又善い事でもそれが自分にとりては礙となる、猶一つ言へば信仰を求むると言ふ事がさて如何にせば信仰を求むる事が出来るかと言ふて種々と心をくだく是信仰を求むる事がさりと異なるのである。所が今無礙とはかゝるさわりのさつばりない様になつたのと言ふ、一切さわりなしとは物質的

のさわりのないのと言ふか但しは學問上の満足をして十分に智識の出來たのと言ふか、如何なる點がさわりがなくなつたのであるか。人生は必しも生活の爲めではない人生は各自爲すべき仕事を爲す爲めに生れて居るのである、學生としても宗教家としても教育家としても政治家實業家労働者皆各自己の自分を専心つとめる事にある。唯生されば可なりと言ふは慥にさわりである、唯生ける事ばかりが決して人生の目的でない、自分に適した仕事を爲るが人生の面目である。爲すべき生活を爲す必しも美酒佳肴を言ふのではない、唯爲すべき事を爲す事に於て始めて満足するのである無礙となるのである。食物生活如斯く名聲名譽猶同様である。人間として過分の境を得ると言ふ事は自ら愧ぢざるを得ない、將來にむかひて如何なる事が來るとか來ないとかそんな事に關心するのはない、唯人間實際の道程に於て力を盡して爲すが吾人目下第一のつとめである。即ち信仰上無礙の境である廣々とした絶對の境に入るのである。さればこの境は如何にして得られるか、その境界の有様は如何、自分で思ふには、實に一切さわり無き廣大なる境に一致する、佛陀の境界を認むる事に於て一致するのである。盡十方無礙光佛の境地即ち無礙の佛界である、この佛界に入るのである。第一吾人の信仰不信仰と言ふ、どうしてそれが得られるかなと言ふのはそれは信仰は得られるか得られぬかの疑のさわりに陥入つて居るまだ餘裕のある話である。茲に佛の境界盡十方無礙光とは如何、既に言葉の上には表はるゝ如く、到る處として無礙ならぬはなし少しもさわりがない境を言ふのである。唯言葉の上の事でない眞

實佛陀の境に對する味ひを感じ來たれば自分の心のうち更に一毫の礙もはらひさるゝ、又客觀的に世間に對して無礙を認め來るのである。内心無礙になると言ふは煩惱即貪る心怒る心等の内心の愚痴なざわり常に縛せられて居るそれが爲めに無礙自在の境に入る事が出來ないのである。然るに心茲に佛の廣大の境にむかへば一切無礙の味を感じる事を得るのである。人と人と交際する事に於て一方に於てあしく思へば必ず亦他方にても悪しく感ずる、人生の總てが皆さうである、互に相碍る心を起すものである。然るに佛陀の御思召はどうであるか、實にこの人間の心の反對である、佛は佛を信せざるのみならず又佛にむかひて誹謗するものあらば、佛は満心を以て之を憐み給ふのである。常不輕菩薩は人ありこの菩薩に害を加へる、この菩薩曰く一切のもの皆佛を難有尊く思ふ心を有するものなり、然るに今この人その事に氣がつかぬからかくわれに害を爲すなり、われを打ちわれを害する事はやがて佛の道に引入るゝの縁となるなりと。佛陀に於ては如何たとひ吾人の心身害毒をもつて向ふ、雖も一切無礙なり、佛は終にかゝるものを同化したる、かゝるものこそ眞に佛陀の御側に近づく道である、人間は途中にて互に反目した友でもはやその間に一々の礙かさしはさまるものである、淺間敷い次第であるがこれが吾々人間の面目である。佛の眼より見れば總て一切の人間が助け度い、眞の絶對の味を知らぬものは憐れなりと言ふ絶對の同情御慈悲である。衆生の諸の煩惱悪業にさへられぬは唯ひとり佛陀即ち無礙光佛ましますのみである。これを清淨光佛とも歡喜光佛とも言ふ、衆生の汚穢の

心にあらざる衆生の慈悲の心ではないのである。親鸞聖人を害せんとしたるかの辨圓山伏は聖人をうち漏らせしを憤り單身直に稻田の草庵に到れば聖人左右なく平然として出會ひたまひたり。辨圓一度聖人の御顔を見るや燃ゆるが如き害心忽ち消えうせ立所に大懺悔をして聖人と同一の信仰に入つたのである。是詢に聖人の心中一點のさわりなく佛陀の心を念じ佛の心を以て心としてむかはれたからである。如此内心に於けるさわりは佛陀の御心に於て一切無礙となるのである、衆生の煩惱悪業を清め盡し給ふのである、實に信仰の實驗上靜に味ふ可き事である。

この講話の前に御話しがありました私の信仰の餘瀝を御讀み下さつてそれが縁となつて心が安らけくなつたとの御話であります。その方は十年程も已前から種々と御苦るもふになつて居られた所右の次第で御安心なされた。すぐに親類の家へ往つてその喜びを語られたがその時親類の方の曰はるゝには、御前は既に業に佛の光に攝取されて居つたのである、それが今漸く氣がつき目が醒めたのであると言ふて共に喜ばれたそうして私も大層難有感じました。世の中を見るのに人と人とのつき合せの礙が實に多い、誰れでもかかれても皆この礙をもつて居る。そのさわりの未だ來ない間は人間は眞面目でない、然るにさて世の中は有礙の境である安らかならぬ所であると言ふ事に目のついて來る事に於て、その態度も眞面目になり、自分の罪惡多き礙のある事も、人間の力の及ばぬ事にも氣がついて來るのである。私も近頃懺悔録と言ふのを出しました。又今の如くに長々御苦しみになつた御方の話を聞

いては同情の念に堪えない。この處へ御出での方々は己に一の礙を持つて御座つた方、又現に持つて御座る方々とももふ。然れば佛の無礙の眞の味は先づ有礙を感じなければ、人生はさわり多きものである事に氣が附かなければ、無礙の味は分らぬのである、自分の礙あるを思ふにつけ佛の御慈悲の偉大なる事と思ふ。佛の御慈悲と言ふは概念や觀念やではない、そんなものは本當の力ではない。自分の内心に表はれたる佛の偉大なる慈悲は目に見たり姿にあらはれたりする事ではないのである、本當にその御慈悲を心の底に徹底して感ずるのである。佛の同情はこの人間の同情の全く滅したその所に其の同情が始まるのである。善人猶以て往生をどく況んや悪人をや、人間の力の絶滅したときに始めて感じ來るのである。世間の何物にも心満足する能はず四面礙を以てかこまれたるとき唯一路佛陀の御慈悲の強さを感じ來る、それにむかふときに始めて難有いと心に徹底したときに、始めて味ふ事が出來るのである。絶對御慈悲の境を望むはその態度は眞に眞面目である。唯それにむかつてあせる態度は未だ大安心の大態度でない。あせるとは信仰に對する礙である、その例は、ある大今迄儒教の教育を受けて多少禪の味も味ふて居たが、自分の財産を銀行との關係で支出しなければならぬ事となり、その上種々法律上の汚名の爲入獄する事になつた。その人の知己がその人に曰ふに、御前入獄すれば一切無我無心にならぬばいかんと、その人は自分がかくなつたのは實に天なり命なり須らく無我無心になるべしと考へてそやつて見るどうもいかん、無我無心になり度いけれども實にどうも六ヶ敷いと

言ふて苦んで居つたとき、私はその人に會ふて話した。その人の態度は慥に絶對にむかつてながめて居る、しかし無我無心にならねばならぬ、是非そうせねばならぬと言ふ事は無我無心ではない、無我無心になれぬのである。佛陀絶對の境は本來無我ではないか、あなたは今迄は名譽とか財産とかの爲めに心靈の問題を冷淡にして居つたのが、今や心中心靈上の大問題が輝いて來たのである、佛陀の偉大なる御計ひを唯ながめさせてもらふ計りが本來ではないか、無我にならんならんとあせるのではない、本來無我なのであるとどう申した所その人は非常に喜ばれた。その意味は吾々本來の佛の絶對の御慈悲に浴して從容として日暮しさせてもらふが本來の面目である。そうしなければならん、そう思はなければいかんと言ふのではない、既に己に佛の御慈悲の中に居る身が不可思議の縁に逢ふて氣がつく、氣をつかしてもらふのである。嗚呼實に自分は如來の子であつたかと悟つたのが眞の面目、目が醒め出した味ひである。世の中の事皆佛陀の御計ひなりとおもふ、いつも無礙の大境界を吾々の有礙心を以て計らうとするのである。人間の考を以てかれこれ考へるのはあやまちである、計らざる事柄の起り來るも皆佛の偉大なる御算があるからである、到底吾人の心の愚痴ボイものは唯佛陀に信賴する外はない。佛の御心よりは一切の人間をどうしても導き度いと言ふ御慈悲で満ち、御座るのである。人々その慈悲の光のうちに居ながらその光を一向感せぬのである、丁度水の中に居ながら渴を叫ぶのと同じく、此空氣の中に在りて毎日毎時呼吸しながらも誰れ一人空氣で生活する事を知ら

ぬも同様である。吾人が今迄身も達者で佛後三千年の今日この教を聞きながら更にそれとも思はぬ淺間敷ものである。蓮如上人は何事も佛天の御はからひなりと、その偉大なる御力を來するとき始めて難有いと思ふのである、人ありて私は何事も佛にまかして生活するさあらぬ體で言ふて居るが、その人の劃策との調和はどうかと言ふとその人は唯口ばかりのすてぢりふである事が分る。捨て科白の信仰は根底もなにもない、信仰は決してそんな捨て科白でない。佛の御計ひをその儘信じ奉るので、決してあせるのではない、一切無礙の境地に入るのである。吾々が明日の事をかれこれとあもうがそれは積極にも消極にも何にもかも一切無礙に佛の御計ひにまかせ奉る已上從容として爲すべきを爲すのである。

もう一ツ人生上總ての客觀的のもの皆佛の力ならざるはない。一例を言へば、これは市ヶ谷の監獄に居る人で死刑に處せられる人、その人は他の人にくまれて居る、私がその人に會ふて話した。佛は人間の力の極まる所に大慈悲の力あらはる、佛は心のみならず肉體に於ても救ふやもしれぬ、私はその人に極簡話に話しました。その人は今迄誰れが何と言ふても剛情であつたのが、その時今迄の事を懺悔するのに曰く私はどうあらうとこうあらうと佛様にまかせ奉りますと言ふたのに深く感動しました。他の一人に會ふた所その人が言ふのに先日本を見たのに、なさけと言ふ事が書いてあつた、それは大山さんが獵に行くとき部下のものに注意して寢鳥を打つなと言はれた、それに感じましたと言ふ、その人は自分が今迄種々な惡事をして來て居ながらそれを思はない、しかし

慥然する態度はあるがそれに安住する態度が出て來ない、その安住の見地で其仕事日々の事をすると言ふ心が起らぬ。即ち絶對無礙の地盤に立って無私の行ひを爲る事、佛の廣大方に立ちて相對人生の上に仕事をする事である。應用の可なはぬ信仰は眞の信仰とは言へぬ。人生迷の立場をぶち破つて佛陀絶對の境地に入る、その絶對の境地より再び人生この迷ひの上にもち來る、茲に眞の味が活き／＼して來るのである。

かの日蓮上人の未だ佐渡に流されぬ已前と、佐渡に流された後の上人とは一見非常に變つて居るやうに見える、激烈なる上人は和順なる上人となりて佐渡より出て來られた。此何事も和平にと同信の人に告げた日蓮上人こそその眞の面目である。ルーテルが九十五個條を掲げ次でオームス議場に上たる當時のルーテルと、ワルトブルヒ城中の幽居よりウキテンベルヒに歸るときルーテルとはその態度先の一歩も退かざる意氣は化して和平の態度となつた、これ最も味ふ可き點である。但し固よりその中心の信念は毫も變化せず終始一貫して居るのである。親鸞聖人は始めより和平温順の態度であつたが、その所信を主張するに至りては實に前兩者に一歩も譲られぬのである。それが爲謔言に逢ひ流刑に處せられたが、その信する所は一歩も退けられぬのである。その晩年に至りては唯佛天の御計ひに任せて一切無礙自在の境にありて教を弘め給ふ、消極に見るとさうが眞に積極の味のある所である。その爲すへき仕事を眞直にするに於て活版屋の小僧も國家の大臣も更に變る所はないのである。佛陀一切無礙の境に任して進み度いと思ひます。今日の御話はそれからそれへと御話

大山さんのなさけと言ふ事丈感じたと見えて私に話ししました。猶他の一人は歎異鈔を毎日二度宛讀んで居る。この人元より裁判の結果であるから死刑に處せられると思ふて居つた所無期徒刑となつたので非常に喜び確固な信仰を得たと言ふ。私共はこれ等のの人々からかへつて深く感じさして思ふのである。世の中の事何にも佛の廣大なる御思召なりと思ひ來れば何不足もないのである、皆茲に御座る方々でも氣が附けば至て夢のやうなもの、目の醒覺たる境が本來無礙の境である。全體吾々は本來無我無心のうちに居ながらいつもいつも心をあせつて居る。

内心上に於て人生上の生活名譽位置財産に日夜心を勞して居る。大無量壽經と言ふ御經に、田あれば田を愛ひ、宅あれば宅を愛ふ、牛馬六畜、奴婢錢財、衣食什物復た共に之を愛ふと。あればあるて愛ひ更に安き時がないのである、又曰、田無なければ亦愛ふ田あらん事を欲す、宅なければ亦愛ふ宅あらん事を欲す、牛馬六畜、奴婢錢財、衣食什物無ければ亦愛ひこれあらん事を欲すと。無ければないて亦心配する。佛陀の境に入れば更に愛はないのである。親鸞聖人のつねの仰せには、彌陀の五劫思惟の願を、よく／＼案ずればひとへに親鸞一人がためなりけりと。法然上人の念佛の功德を説かると聞かれたる親鸞聖人は唯難有いと言ふその御心に於て既に信仰の大海に入り給ふ。信仰を得んとあせるは既に自力なり、礙りなき佛陀の慈悲これを一度信じさしてもらへば、この心さはりもなくなり、總ての方面一切無礙である、世界中總ての事に於てその味を見出し來るのである。人々絶對を

しましたのでまともな所もあつたやうであります。要するに佛天の御計ひにまかせ奉り各自爲すべき道に志し度いと思ひます。

實 驗

告 白 一

塚 本 大 愚

大愚は親の慈心を破り、朋友知己の慈心に住み、師の慈心に包まれ、主上の大御心に蓋はれ、大慈大悲超日月光、無碍光、不可思議光に攝取せらる。

親、知己、師、主上の慈心の光源、慈光の光源は、不可思議光なり、大心海なり、一切の慈悲、同情、慈愛、厚意、忠恕、眞實、正義、博愛、仁義、智勇、寛大、度量、清淨、潔白、高明、等總ての善、總ての眞、總ての美、皆是天心力の顯現ならざるはなく、彌陀の廻向ならざるはなく、佛の大御心ならざるはなし、恰も水の水源、上流、中流、下流、河口、及流派ありと雖とも、畢竟一河といふに同じ、決して隔絶あるにあらず、無二にして一體なり。

然り而して慈光普く無邊を照して到らざる所無く、徹せざる所なし、大慈大願の海水は一切の物を浸さることなし、此故に大愚は何處まで行ても、去りても、離れても、止まりても、彌陀の大御心の外に出づること能はず、彌陀智願の廣海に浴せざる時なし、幾度死逝き、死逝きして、生れて來ても、生れ來ても同じ弘誓の御船の中、何れに飛出して、狂ひ出して、惡道險路を歩みても、矢張本願一貫の大道中、されば慈光を拜せざらんと欲するも拜せざるを得ず、浴せざらんと欲するも不能、歸依すまじと思ふも外に歸依する所としては更になし、小なる我は無礙大の御佛に吞まれ、闇愚無明の我は佛大慈の無碍光に照破され、軟弱なる我は金剛不壞勇猛不退轉の大心力に降伏せしめられ、醜汚なる我は清淨の御心に對し

頭上らず、狭苦しき我は逆悪攝取したまふ廣大なる大御心に敵對する能はず。高の知れた學者先生の言さへ信ずる我は、進んで大慈大悲の彌陀の大信心に化せられ、限り有る我願は無窮の願力に同うせられ我は一として存するを許されざるに至り。

我がはひは無要なされたり、我れ無となれるにあらざ、我自力の廻向してはてたるにもあらざ、我大悲の本願海に歸入したるにもあらざるなり。超世の願力ましますば我れ何をかほらひ、何をか憂へん。敬白、

斷捧書翰候 更めて申上るまでも無之候へ共思へば大愚程即なるものは無御座候。昨夜は福岡の友人及小供帯が其親切なる心美しき心を大愚の身上に掛き候や否や、今日の晝の時に京都、大阪名古屋の人々が此の身上に厚き情を懸けられしや否や、毎日、妄念妄想の起る時、東京の恩人は三百有餘里離れたる瀬高町にある大愚の身の上に慈光を蒙らしめらるるや否や、其時刻こそ明らかに知る能はざるも諸恩人の慈心の裡に住し居ることは堅く信じて疑はず候。

斯くても諸恩人の御身の上は毫も思ひやること無之候。是とおなじく久遠劫の昔より、無斷間大愚の身上に大御心を碎きたまひし、大愚大智の如來の廣大無邊の恩徳は忘れ勝ちに候、極悪深重とも何とも彼とも云ひ様のない恩しらずに候。

是れでも以前は知らざるを知れりとし、邪見を正見とし、虚假不實の我身を眞實とし、無怖無愧の此身を廉耻あるものとし、悟として省みざりしを想へば、我ながらおかしくもあり、ほんに眞箇に不及候。如來の大慈願力も不思議、我等の已徳根性力も實に不可説不可思議に候、此不可思議の已徳根性も不思議中の不思議の大慈願力に依りて、知らざるを知らずとし、邪見を邪見とし、頼まれぬ自力を頼まれぬとしり、自力の廻向捨て果てて、如來の廻向に歸入せしめられ候、是についても恩師昨年五月以來の御心勞察し上げ奉り候、恩師の大心力いよ／＼難有存居り候、御座なもちて大愚の父も如來の大慈を仰ぎ居り候間御喜こび下されたく候。

昨夜佛前に和讃拜誦の折、母は今日はおぼ様の命日なれば、おぼ様も御喜こびなざるであらうとしたり候、大愚は母の此言をき、大に嬉しく感ず候、母はいまだ御慈恩をよるこぶ身には無之候得共、朝夕大愚と共に御念佛申候間、

ことは常に一切衆生を憐念したまふ彌陀の大智大悲の大心力に委し奉るより外更に工夫無之候、人世の有様を觀て、一滴の涙もなき無善造惡の我等、何の彼のとはからふ資格微塵程も無之候。彌陀如來の大御心を仰がず、超世の慈願を聞かざるものか、人生をかたるは笑止千萬に候、信心なき愚者となすとははやくも仰せられたる言と感ず入り候。信心なき愚者が爲政者となり、或は教育家といはれて居る間は、文明すやの福利増進すやの、思もよらず候、此後軍艦とか城とか破れ易いものに大金を費さむより、人民をして金剛不壞の法域に入らしめて、無障無碍の弘誓の御船にのりてまじめ、超日月光の探海燈に無明の暗を破じ、濃霧を消し、自由自在に強風怒濤の中を行動せしむること何より急務と存す候、此急務を果遂するは何かから何まで大慈願力に依るのみに候。

佛勸を奉禮せらるる恩師等之御苦勞、今より恐察致居り候、

告白

岡田 菊 僊

私は信濃の山中に生れ、宣勝寺の門徒にして、先祖代々靈祖師の御流を汲まして頂き、朝夕末代無智、八万の法蔵と、御文の聲に家族何れに居りても、相呼で佛前に飛びつくと申譯で、御内佛の御禮すまじに、食事の許可なく、出産冠婚等に至る迄、御内佛御寺へ申上ます、報恩講御取越は無論のこと、外に何講と何御法を聽聞させて頂き、御内佛へ捧ぐる御花畑の栽培より御打敷、御座し、御油とかに至る迄、夫れ／＼所を得、嚴として犯すべからず、祖師祖先の御命日には肉食は大禁物、田圃の産物も御初ものは必ず佛前へ供て、後にたゞ、出入御内佛に告げ、御内佛の方に足を出し、手を洗はずして御道具を扱はば、勿体なく御罰が當る之禮詞を蒙り、因習の久しき、家庭に養せられ、父上よりは御信心を頂け、母上よりは御念佛唱へ、祖父母よりは御まいりなし、死して地獄に墮ち、無量永劫血廻り立て、泣かればならぬ、御信心を頂いて極樂様へやつて頂だけ、御衆の御院主様に好く聞かせて頂き、老少不定故、長編張てはいけなむと、昔々私

信心なきも遠からずと存居候、兄も毎日勤行懈怠なきよし、兄の養母申し居り候、大愚は兄と共に禮拜し居ること、これなく候へ共、朝夕の行をき、大に喜ぶこび居り候、兎にも角にも如來の大道に足をむけしをおよるこびくだされた候。

大愚朝夕の勤行は、唯々御和讃拜誦、稱名念佛するのみ、御座も正信僊も拜誦にまつらず候、

五濁惡世にかへりては 御和讃を直ちに思ひ出し候 此外朝夕二十首、乃至三十首の御和讃を拜誦して、御慈恩を喜こびしてらひ居り候間御安心下されたく候。

弘誓の力をかむらずは 何れの時にか婆娑を出てむ、

南無阿彌陀佛々々々々

二伸、今朝露國愈和議を乞ひしよし東京電報に見え候、慶喜これにすぎず候、今後の事如何なる結果を結ぶが氣懸りに候、兎にかく農業のことは農業に心を砕く農夫に委し、教育上の事は此處に心を掛く教育家にまかせ、海路航行は航海委員に依り、國家のことは至仁至慈の大御心をたのむの外なきごとく、一切衆生の

を愛して切に教へて下されました、今に眼前に髪髻としています、父上に抱かれつゝ、父上は頻りに御念佛申し、私、叛命無量壽如來、南無不可思議光と、正信僊を教へて下されました、遊戯にの、い、さん、かざりして、風呂敷を袈裟代用、正信僊を讀むのが樂みでありました、簡程に佛縁を結ばせて頂き、漸々生長し、小學の先生も、眞宗御寺の生れの御方ですから、何處となく御縁を結ばせて頂き、子曰關々唯鳩の先生も、禪家の和尚様、只今専門に修し居る繪畫の先生も、故の株仙禪師の衣鉢を傳はりたる御方にて、佛敎の御道理を唱へて、繪畫の六法を教へて頂きました、斯く御因縁は山々なれど、借御信心と云ふは、いたゞだかれずして困る、もし發病して今死んだらどうしたものだ、地獄に墮つるはせつなし極樂に行きたし、どうすれば宜敷か、こうすれば宜敷かと、老病苦の相を觀ては心配になり、往生要集の畫圖を觀ては戦慄し、御客僧様の御説教を聽聞して心悸き、何となく抗の中へても引止めらるゝ様に感ずました、されど時過れば則ち打ち捨て、置のてす、其當時御本山より布教に小金丸大淳と申す方（七里さん）の教化に背し詩などは談話調でありました、御差廻しになり、私の家に御宿下され、御法筵に開けました、御若い御出家で、頭をくり／＼と剃り、墨の衣に墨の御袈裟で、行住坐臥御念佛の御聲の殊勝なる、私に何事も御佛の御本願にすかあせて頂き、御念佛申し、天晴れ奮發勵せよと申され、其時は子供心に大層難有花か寫して、萬里江山雲霧圖、天涯飛鶴惜師暇、信心慇懃元同契、一段離愁寄玉妃、など、御別れを惜しみし事もありました、

爾來年も長け、世の荒波に漂ひ、段々世の中も面倒に六ヶ敷し、彼の雜踏の議論を見ては心を動かさし、此の書物の道理を聞ては意をなやまし、人々の成功昇進を羨み、探爛たる富貴を欲望し、威權權勢を羨むの姿を希望し、自らえらしと思ひ、何事も陽氣の發する所金石も透るなど、心火を燃やし、制止を知らず、性元と繪畫を愛し且つ描かんと欲し、南宗の形似以外を樂み、一室に閉ぢこもりて、四君子十六法の研究尤も愉快に、時を並鞋にて、五里ばかりの山坂越で、斷先生の門に伺ひ、正を願ひ、修身の御話を聞きたるとき、いと快活に嘖り、數週の辭園を忘れました、されど功名心物々として禁ずる能はず、こんな山間僻地に居ては何事も出来ずとして、繩を脱し笈を買ひ、或は東京、或は下野、或は越後等、萍遊を試み畫を講下ましたけれども、功成る夫れ何れの時ぞの嘆、そち／＼して居る内に、父上は村長奉職中御用の途次突然中症に感はれました、長男の事、茲に

道にたがへる業を爲す身は、この世、後の世、ともに苦しむ。かへりみるだも、くるしきを、罪の報いを見れば、いかに。

The evil-doer suffers in this world, and he suffers in the next; he suffers both. He suffers when he thinks of the evil he has done; he suffers more when going on the evil path.

令悔後悔、爲惡兩悔、受罪然悔、法句經、慈經品。

道にかなへる業を爲す身は、この世、後の世、ともに樂しむ。かへり見るだも、たのしきを、福の報いを見れば、いかに。

The virtuous man is happy in this world, and he is happy in the next; he is happy in both. He is happy when he thinks of the good he has done; he is still more happy when going on the good path.

今歡後歡、爲善兩歡、受福悅豫、法句經、慈經品。

言ふに巧みに、行の拙なき人をたとへなば、色のみあたに、にほへども、香りのそはぬ花ぞ、これ。

Like a beautiful flower, full of colour, but without scent, are the fine but fruitless words of him who does not act accordingly.

如可意華、色好無香、工語如是、不行無得、法句經、慈經品。

よき言の葉に、相應しく、行ふ人をたとへなば、見る目もあやに、にほひつゝ、色も香もある花ぞ、これ。

But, like a beautiful flower full of colour and full of scent, are the fine and fruitful words of him who acts accordingly.

如可意華、色美且香、工語有行、必得其福、法句經、慈經品。

熟睡すば、夜は彌長く、つかれば、前途は遠し。美教を知らぬものには、すみろかる此世なりけり。

Long is the night to him who is awake; long is a mile to him who is tired; long is life to the foolish who do not know the true law.

不寐無夜長、疲倦道長、莫知正法、法句經、慈經品。

われにますよき友もなく、相應しき道伴なくば、なか／＼に、獨り旅せよ。癡者に伴ふなごう。

If a traveller does not meet with one who is his better, or his equal, let him firmly keep to his solitary journey; there is no companionship with a fool.

學無朋類、不得善友、獨守空室、不與愚伴、法句經、慈經品。

あろかなるが、身を終ふるまで、聖の人に近づくも、眞の道をしり得ぬは、中にひたりて、味を、わき得ぬ匙に似たるかな。

If a fool be associated with a wise man even all his life, he will perceive the truth as little as a spoon perceives the taste of soup.

愚人盡形壽、承事明智人、亦不知眞法、如杓舐粥食、要頌經、善友品。

さかしさが、しばしとだにも、聖の人に近づきて、眞の道をしり得んは、瞬間にして、味を、くみしる舌に似たるかな。

If an intelligent man be associated for one minute only with a wise man, he will soon perceive the truth, as the tongue perceives the taste of soup.

智者須臾間、承事賢聖人、一々知眞法、如舌一嘗味、法句經、慈經品。

(中舎、十七。四分律、四十三。參照)

(同)

悪を犯すことはありとも、
その中に、喜びを見ず、
こゝろして、ふたゝびせざれ。
世に、苦みをひかぬ罪なし。

If a man commits a sin, let him not do it again;
let him not delight in sin: pain is the outcome of evil.

人雖^モ爲^ス惡^ノ行^ハ、亦^レ不^レ數^テ作^ラ。
於^テ彼^ノ意^ニ不^レ樂^マ、知^ル惡^ノ爲^ニ苦^シ。
山^ノ曉^ニ、惡^ノ行^ハ止^ム。
(法^ノ句^ノ經^ニ。參^照。)

善を作すこともありせば、
その中に、喜びを見て、
ふたゝび、これを作すをつとめよ。
世に樂みをひかぬ善なし。

If a man does what is good, let him do it again;
let him delight in it: happiness is the outcome of good.

人能^ク作^ラ其^ノ福^ヲ、亦^レ當^テ數^テ造^ラ。
於^テ彼^ノ意^ニ願^ハ樂^シ、善^ヲ受^ク其^ノ福^ヲ。
同
(同)

不死に趣むく道知らぬ
百歳の壽長きより、
よし、短くも、道を知る
その一日こそ、めてたけれ。

And he who lives a hundred years, not seeing the
immortal place; a life of one day is better if a man
sees a immortal place.

若^シ人^ノ壽^ハ百^ニ歳^ニ、不^レ見^ル甘^{露^ノ}道^ヲ、
不^レ如^ク生^ク一^日、服^シ行^ハ甘^{露^ノ}味^ヲ。
法^ノ句^ノ經^ニ、述^ス千^ノ語^ヲ。

たとひ百歳、生くるとも、
けだかさ法を知らずば、
朝に聞きて、暮にして、
死ぬるも、これにまらりなご。

And he who lives a hundred years, not seeing the
highest law, a life of one day is better, if a man sees
the highest law.

若^シ人^ノ壽^ハ百^ニ歳^ニ、不^レ知^ル大^{道^ノ}義^ヲ、
不^レ如^ク生^ク一^日、學^ビ推^シ佛^ノ法^ヲ要^ヲ。
同

喇嘛僧談

○此頃一人の喇嘛僧が日本に來りつゝある、蒙古のアルコ
ルチンの王族で名をノルブといふ、譯すれば寶善といふ意味
になる。滿清の發祥地たる奉天の清國皇廟の住僧である。

○此人か日本に來た譯が面白い。奉天の戰の前に日本軍が
偵察するに露軍の中に蒙古人が居る様子である、夫故我軍で
は大に怒りて、奉天に入りたる時は第一に皇廟の喇嘛僧を初
め、皆縛り上げて飽まで取調べんと云ふ氣合を示した。

○然るに是は大なる間違であつたので、今より二三百年前
蒙古十八旗の隨一たる「ブリヤード」と稱する一種族が露西
亞に屬した、其時は決して戰爭には出さぬと云ふ約束であつた
にも拘はらず、無理に驅り出したのであつて、決して蒙古人
全體には何の關係もなきのであつた、夫を何とかして、日本
に知らせたいと考へた

○其とを先年日本へ來遊したる北京の陽和宮の喇嘛たるア
チャフイーに通じた、喇嘛は其事を北京の警務學堂に居らる
、河島氏及び此度喇嘛僧を日本へ連れて來られた佐々木安五
郎氏に相談せられた、そこで兩氏は果して此事をアチャフイー
が誓言する、ならば偽なき事を信じて盡力すべしとの事であつた、固より事實のことなれば直に日本公使館へ其旨を通
じ、且日本が既に滿洲に於て露國の勢力を壓したる已上は此
次に來るべき問題は蒙古に對する露國の政略である、故に此
際日本の蒙古に對する一舉一動は大に氣を附けねばならぬと
の事であつた、公使館より直に滿洲の日本軍へ電報が掛けら

れ、奉天占領の後、直に皇廟の門には護衛兵がつけられ、將
校以上と雖、斷なくして入るべからずと貼り出されて、厚く
保護さるゝ様になつた。

○抑々露西亞が西藏蒙古に對する政策が著しい、先づ「ブ
リヤード」に對して各自の家に於ては一切喇嘛を拜することを
禁止、外には大なる喇嘛寺院を建築して、此所に來りて禮拜
することを許した、實は之を迫害して、外面保護する様にみ
せかけて、西藏蒙古を誘致するのである、且「ブリヤード」の
秀才二十人程に資金を給して西藏に遊學せしめた、ラッサの
大喇嘛の經文の師匠は此留學生の成業した一人であつた、故
に平生大喇嘛に向て露の侍むべきを説き、露國よりは古き銃
三千挺を贈つた、夫を用ゐて英兵と戦ひ、忽ちラッサを遁れ
てクローンに止つた。

○クローンの喇嘛は數年前より一の寺院を建て、我友が來
るを待つと言ひつゝあつた、然るに果して今回のことあつた
爲めに非常に土地の人民が大喇嘛に參詣するに及んだ、露亞
西人は全體西藏を救ひに來ることゝ考へて居たに來ない、段
々露西亞の信すべからざることを悟りて、大喇嘛は支那に來
ることゝした、しかるに清朝でも大喇嘛が來れば大に欵待す
べき習慣で非常なる費用を要する、故に五臺山に止ることゝ
なつた、前號まで菊池師が紹介されたる靈境に大喇嘛は現に
止りつゝある。

○菊池師等の一行が、支那へ往かれた時の事が恰も神仙談
の如くなつて北京に傳はりてあるそうである、四人の僧が普
陀落山より來たと云ふて入京し、陽和宮に於て前代のアチャ

フリーエが面會した、其中の一人肥た背の低き人と頻りに會談をした、後にて日本人であつたことが分つた、佐々木氏は菊池師の五臺山探勝記と又小栗栖香頂師の北京護法論の序文を見て此一行に違ないと合點して居つた。

○話がもとへ戻りてかの「ブリアード」人が無理に軍に驅り出され、最前の方へ出された、彼等は銃を空へ向けて發した、又日本の砲がよく達したために前の「ブリアード」を傷けずして、後にある露兵を斃した、是神佛の力なりと信じて居る、又一方には奉天の喇嘛が日本の保護の厚さに感じ、日本の文化を慕ひ日本の助けを得んと欲し、此「ブルブ」といふ人は五臺山に往かんとしつゝあつた腫を回らして佐々木氏と共に日本に來られたのである、又佐々木氏の連れて來られた目的も日本人の蒙古西藏の經營を怠るべからざる事を知らしたため、既に日東俱樂部やら、貴族院議員の一部の人は話をきかれた筈である。

○「ブルブ」氏は容貌骨格宛然たる日本人である、支那人の様に語を言はず、随分立派な人種である、最も宗教上で感心したのは其信仰力の強きことである、常に珠數をつまぐり經文陀羅尼を誦する時の如き最も眞面目である、日本の佛敎を見て全く同一であるとして、非常に喜んで、一一見聞して居られる、随分熱心なもので、海藏寺の江湖會の時は泊りがけて其席に列し、眞宗大學で話をした時、我々の信仰では僧侶が十人居れば其中必ず羅漢の化身あることを信ずる、今此の如く多くの僧侶の居らるゝ前て話すべき程の者ではありませぬが、御聞き下さるならば、信じて居る通り話すことは少しも厭はぬ

共に同しく佛を念する心持になつて、遂に佛は世界に満ちてあるといふ觀念を生ずる様にならねばならぬといふ。

○喇嘛とは佛と云ふも同様なり、されど一般の佛敎を和尙敎といひ自分の宗旨を喇嘛敎といふ、印度では「バクマードク」と云ふ人が自ら喇嘛と名のり、爾來相次いで生れたる人名か今も一卷の書となつてある、而して西藏に於て「スンハバ」カが生れて紅敎を改革して新敎を起した、即此人が黃敎の第一祖である。

○「スンハバ」カが改革の要點は妻帯を禁し、祈禱を禁し、托鉢を禁じたのである、紅敎にては淫靡に陥たゆへ修行に害あるゆへ之を禁じたので決して女子を賤んだのではない、又從來は祈禱を以て人を呪咀すると云ふ様なことあつたゆへ、斷然之を廢した、又經文を讀むも佛に事ふるも唯未來の爲にして出家は高名富貴を求むることはない、勿論蒙古の俗人は「タラホー」(綠面佛母)に向て求むることがある。

○祈禱の事につき左の如き話がある、ロシアと云ふ祈禱の名人があつて地獄の人を救ひ出さんと云ふ志を起した、しかるに地獄の業なきゆへ地獄へゆけぬ、故に罪なき四十四人の喇嘛を祈り殺した、其中「メラ」といふ二人が燒き殺すことが出来なかつた、ゆへ祈禱の本尊たる「ヤマダ」に尋ねた、すると彼は師を尊ぶ修行が出来てゐるからだと告げられた、遂に罪なき二人を殺した罪で、望の如く地獄へ落ちた、されど其人には苦がなかつた、道を他の犬も苦を免るゝ様に祈禱した、其力で地獄が破壊した、されど新しき地獄が生じて皆之に入れられて、却て前よりも苦んだ、そこで再び「ヤマダ」

との事であつた、護摩の事なども能く分て居るとみえる、護國寺の學校へゆきたる時、丁寧に護摩をたいて貰ふて大に満足せられたさうである。

○全體喇嘛敎なるものが普通に想像されてあるよりも餘程眞面目なものである、密敎の事相と淨土敎の思想が多いやうである、オトバガモト(法藏比丘)の誓願によりて「エビダ」(阿彌陀)といへる佛が正覺を成就し、其名を稱ふるものは來世「トージャー」(極樂)に生れ蓮華の中より化生するのである、若し疑ひながら稱へたるものは五百歳の間花に包まれて居る、又極樂へ生れたるものは我何れに在りしやといふことを知り、又是より如何にして衆生を濟度すべきやと隨意にして、或は國王とも同夫人ともなる、日本の天皇陛下皇后陛下皇太子殿下の如き、生れながらにして人の尊敬を受くる方は之が爲也と我は信ず、日本の方々は何かに信じて居らるゝかと問へり。

○此の如く所謂往相還相の思想が著しく、又極樂につきて説く所も全く同様である、一々大經阿彌陀經の通りである、極樂に畜生たる鳥が居る譯を説かんとしつゝあつたゆへ定め佛の變化せしめ玉ふと云ふ説明があると思つて居たら、此世に居ては、畫師で佛を畫きつゝあつたものが、佛を信せずとも佛畫をかきた徳によつて鳥となつて生れるのであるときゝたときは異様に感じた。

○經文を讀むときの心持を言うて、東には父ありと思ひ、西には母ありと思ひ後には兄弟親屬知己朋友ありと思ひ、前には我に反對する敵を初め一切衆生ありと思ひ、此等人々と

尋ねた、其答に罪業の滅せざる限りは祈禱の力て苦を滅することは出来ぬとの事であつた、之によりて人間の意志を以て苦樂を來さんとする祈禱は無効であることが分かる。

○喇嘛は種々興味ある逸話に富んで居る、先日高等師範の佛敎會の茶話會での話が面白い、康熙帝が頻りに信仰を求められるけれどもどうも眞面目になるとが出来ぬ、そこで其師匠の喇嘛に尋ねられた、其時喇嘛か物語して曰北京附近の墓地を或農夫がつい鋤を以て耕さんしたら、一の古墳に達した、棺も屍骸も皆土になつてあつたが、唯一の赤き心臓だけ存して居つた、其中に美しき少女の姿があらはれてあつた、夫を段々調べて見たるに、北京に於ける某秀才の妹であつた、此墳墓の主は富豪の老人にして、深く其少女を愛して、すべての財産を以て求むるも得ず、遂に之が爲に死に到つたのであつた、若し信仰を求むることかくの如くであつたなれば得られぬ筈はないとの事であつた。

○康熙帝は益々眞面目になられたが未だ信仰を得られない、此に於て再び喇嘛に敎を請はれた、そこで喇嘛は帝に請うて死刑に處せらるべき罪人一人と二門の大砲とを借り受けた、そして此罪人の死生の自由を與へられんことを求めた、帝は之を許された、そこで喇嘛は此罪人を高さ城門の前に連れ出して、大なる鉢に水を滿々と盛り、汝此を持ちて城門の一方の階より上り最高頂に達し、他の階を下り一滴をもこぼさぬならば汝の死を免ず可しと宣告した。

○罪人は眞面目に鉢に盛りたる水を持して階を上り、看守をして之に従て監督せしめた、恰も頂上に達したる頃、かね

て兩方の階の下に据え置きたる大砲を同時に爆發せしめた、此時彼罪人は神色自若として少しも驚くことなく、徐々に他の階を下りて來りた、喇嘛は直ちに看守に罪人が水をこぼしたかと尋ねた、否と答へた、罪人に向て汝は何か聞かなんたかと尋ねた、否と答へた、そこで康熙帝に向て曰く、何故に此の如き大きな音を聞かなかつたであらう、水を一滴こぼすとは、帝は彼が生と死の運命の定まる所なればなり、帝若し此信仰を得ると得ざるは生と死の岐るゝ所なるを知らば、何ぞ信仰の得られぬ筈あらむと、帝色を作して感悟し、忽ち信を生ずと。

不教弟子之訓

菩薩善戒經第四卷云。旃陀羅等及以屠兒。雖行惡業。不能破壞如來正法。不必定墮三惡道中。爲師不能教呵弟子。則破佛法。必定當墮地獄之中。爲名譽故。聚畜徒衆。是名邪見。名魔弟子。

嘆 咏

行々子

庭十坪市に住まへど春されば鶯雀さへづり夏行々子
荒玉の長き年月住ひ居りあやしこの夏葦切の鳴

垣外田の蓮の廣田を飛び越えて庭の槐に來鳴く葦切
五月雨に茶を抜き居れば行々子槐が枝に聲斷たず

よき人の來る家なれば天飛や鳥のやからも來てを
鳴くらむ

甲 之

机上の花

月讀の神のみ言をうつし世に持ちて通はく月見草の花

さか足らず短かき時ゆ咲きつぎて今は三さかの葦にささけり

ぬば玉の夜を咲く花は朝日子の光さしぬれ身を隠しけり

月讀の光てれればかや原に黄色たゞよひ咲ける花かも

かや原の夕日かげろひ消えゆけば萌むあがりけむ月見草の花

岩の上のみどり常立つ松もあれどさ夜をかぎりの月見草の花

ぬば玉の夜を咲く花はいにしへの流され人を思ひ出でしむ

しが花のはかなき色を朝ながめ思へるこゝろ知る人もなし

青葉さす槐の枝に身をかくり聲は鳴けども見えぬ葦切

聲遠くつねは聞きたる行々子いま庭にして暫しまどひつ

葦切のさよろろと響く近き聲蓄へ置かむ器しほし

家近く鳴けば葦切ぬば玉の夜も鳴くものと今年知りつも

五月雨を朝寝し居れば葦切が聲急き鳴くも庭の近く



葦切の聲の響く庭の隅に

千筋立つ烟横吹くゆふ空の下べあかるき藤の八千

管の根の長さ春日を延び足りて咲きはじめたる藤波の花

庭かくむ楯の若葉に風立ちて夕べしづけく揺る、藤波

花の下をもとほり行けば風のむた花のはふりにゆく人見ゆも

藤棚のつくるところの影面の花は色濃く長房たれぬ

池の邊に立ちながむれば藤波のしき波ゆるに物皆ゆるも

柳の端にこぼれて咲ける花ぶさは長房たわに水に垂れたり

藤波の池の外輪を行く人のま袖あかるく夕日さしたり

柳の盡くる池なかぎり咲く花はい向ひたれて見ることがもしも

池に沿ふ柳の八重垣くま／＼は諸花しみに夕かけりせり

紹介

眞言宗綱要

浦上隆應 著

本書は題號の如く眞言宗の綱要を最も明快に説示したるもの、宗内の人は固より有も佛敎の研究に志あらむ者一度本書を讀み其の綱要は立所に之を握手し得べきなり、亦之を以て宗敎學校の教科書と爲す其の適好たるを失はざるべし、由來佛敎に於ては各宗の分立甚だ廣く人其綱要を識るに苦しむ、吾人は幸に本書を率先として此の種の好者の撰々公刊せられむ事を祈る、本書の内容は第一章序説に始まり法脈相傳、所依の經典、立敎開宗、修證門と經て第六章結論に終る、而して其間各章節を分ちて説明其の宜しきを待たり(定價三十五錢和歌山縣高野山眞言宗聯合大學發行)

時代宗敎

境野黄洋 著

著者の序言に曰く「本書は余が諸所にて演説した草稿または筆記等を纂めたもので雜誌「新佛敎」の上に掲載したるものも少くはない、元より系統ある著書ではないから、中には重複したことも澤山にあるが別段削除せず其のまゝを掲ぐることにした、本書全篇の主意は畢竟余等同志が數年來唱道して居る新佛敎宣布といふ目的を外れたものはないのであるが、然し其信仰上の談は全く余一個の見解であるから之によつて他の同志を煩す様の事の無い様に之を讀者に願つて置かなければならぬ云々」本書の性質は即ち如斯し、而して本書は實に昨年九月遼陽に於て戰歿せられたる著者の令弟戰死紀念の爲めに發刊せられたるものなりと謂ふ(定價四拾錢 東京芝區鴻盟社發行)

印度佛敎史綱

境野哲 著

印度佛敎史に關するもの、故藤井氏の印度佛敎小史あり、姉崎氏の印度宗敎史等あれども、或は簡に過ぎ、或は繁に流れ、讀者をして容易に其梗概を知るに苦ましむ。三千年來の印度佛敎史を研究する亦容易の業にあらず。境野君の近著印

度佛敎史綱を惠贈せらるゝにあたり、之を一讀するに、文章平易通俗にして理解し易く、印度佛敎の史跡を一貫して條理井然よく其要所を穿鑿し、繁簡宜しきに適ひ、之を研究する者には極めて好著たるを失はば、本書は第一章より第十五章に成り、其間に釋尊の小傳あり、原始佛敎の略説あり、戒律の要領あり、馬鳴菩薩論あり、其他小乘諸派の分裂、大乘敎の發達あり、佛典の結集、傳記の類精密に取捨して之を記載せられたり。著者特別の史眼を有するとは人の皆知る所、吾人は本書に對して特に蛇足を加ふるの要を見ざる也。(定價金六十五錢、森江本店) 劍虹生

佛敎年代考

小野玄妙 著

確乎たる史籍の徵すべきものなきにも拘らず、よく埋没せる佛敎の事跡を研究して之を公にしたるものは、佛敎年代考なりとす。史的の研究に従事するものに取りて、最も困難を感ずるは年代考なるべし。況や遠く二三千年を隔つる印度佛敎史に於てをや。近世に至りて佛敎を初めとし佛典結集の年代の如き多少考究せられたりと雖、未だ之を一冊に纏めたるもの甚だ少なし。殊に著者は忠實に之を研究したるものにて、假令先盟の議論と雖、事實に合せざる所は一々之を論破し、以て著者の意見を附加せり。亦これ印度佛敎史研究の一材料を興へたるもの、吾人をしてまゝ首肯し能はざる點あるも、吾人は深く著者の勞を多として此に紹介する所以也。(定價六十錢 宗教研究會) 劍虹生

靈華集

仁科幽溪 著

是れ幽溪仁科徳之助君の宗教詩集なり、聞く君は幼時既に衣食の道に迫はれ終に修學の好機を逸したる所謂無敎育の一人なりと、君今現に校正係として三光堂にあり、本誌の如き亦實に同君の校正せらるゝ處、本集は即ち君が實驗的靈感の結晶なりと謂ふ。片々たる一小冊子に過ぎずと雖も「靈華」水滸る以下廿七編を收め、猶ほ附録として「天龍峽の記」一篇を加ふ、用語未だ精練ならず、内容亦間々純熟を欠く、宗教詩として之を見る特に隨すべきの點甚だ多し。然りと雖も世を擧げて浮漚の趣味のみ是れ食るの時に當り獨り宗教詩を以て自ら娛まむとする君の意氣は吾人の先づ深く多とせざるべからざる所、況んや君の境遇を知り、君が恭謙の美質を識る記者に於ては亦一種別個の感無くむべあらざるなり、蓋し

時報

高師佛敎會茶話會

君は既に成りたる人にあらず、今將に成りつゝあるの人驚くば宗教詩の宗教詩たる本領を自覺し、斷つて世の雷同者流に目を假すとなく靜かに自己の本有を練磨し給はむ事を、敢て卑言を捧ぐると如斯し、製木亦頗る清爽、心ある人の一讀をすゝむ。(定價廿錢 東京神田三光堂發行)

高等師範學校に於ける佛敎會は、毎週一回曠異鈔の講話を開きて、信仰を求むるの氣風盛なるが、夏休暇前最終の會として、六月二十三日同校後庭に於ける有朋館にて愉快なる茶話會を開きたり、敎授諸氏出席せられ、有志の集會漸次増加して七八十名にも及びたり、此日雨霽れて綠陰風清く、窓外の光景嬉々として笑ふが如く、草木欣欣として榮ふるに向んとす、又恰も奉天皇廟住僧ノルズ氏及び佐々木安五郎氏も參會せらるゝあり、主客師弟、卓を圍みて和氣藹々として近來稀に見る心地よき會合なりき、委員の挨拶吉田靜致氏の談話あり、氏は専門の倫理に於ける「權利」と云へる觀念につきて氏が所見を陳べられたり、曰く

從來一般の考にては各人本來權利を有するものなりとし、其權利に伴ふ義務あるものと爲すものゝ如し、蓋し是れ誤也、各人義務なるものありて、此義務を行ふ爲めに權利を生ずるに至る也、即ち人の此世に存するや本來何物かを爲すべき義務を有するものなり、既に其義務を行はんと

するにつきて権利あるなり、例へば教師なるものは人を教育する大なる義務を負へるものなり、此義務を行ふ爲に教師に夫々の権利あるなり、若し此義務を行はずして権利を主張するあらば大なる誤なるべし、此種の誤は今日澤山認むるを得べし、例へば今頃女子教育といへる問題につきて女子には學問さすべからず、學問すれば女子らしくなくなる、故に女子は學問する権利なきが如くに言ふものあり、是なども初めより學問さすべきか否やと云ふとを先きにして議論を立つる故に妙な結論に達するので抑々女子は女子らしく、其女子の仕事をするべき義務ある上は、其女子に適する教育を受くべき権利を生じ來るとも言はねばならぬ、すべて何れの職にせよ位置にせよ各其義務を行ふ爲めに其義務相當の権利を生ずといふことを考ざるべからず云々かくの如きの意義をば宗教上に於ては如何にして解すべきかの談話に移り近角は亦所見を述べて曰く、

嘗て『信仰の除瀝』の或一章に「生きたが爲に働くべからず、働かんが爲に生くべし」といふことを書きな心持が同様である、若し人間は生くるが目的であるといふことにすれば其目的の爲には如何様にしてもよいと云ふ風になり安んじ、併し働くことが目的であるとすれば先づ働けるだけの爲めに生活すればよいと云ふ風になつてくる、宗教で言へば是が絶對的見地の開けた生活である、此絶對的見地の開けると開けざるとは大なる違である、若し此見地の開けざるときは如何に眞面目なる仕事をしてもだめである、然るに若し此見地が開けてくれば、仕事は同様の事をして居

ても、全く心持が別である、たとへば是は主人の命であるからせねばならぬ、親の命であるから我働せねばならぬと云ふて仕事をするのは如何に感心であるか云ふても力味心のある自力を脱せぬ、しがらに主人か命しても命せずとも親が言つても言はずともかくせずには居られぬといふ心持になつたときは全く絶對見地の開けたのである、此見地が開けてくれば爲す事は失張相對人生の事なれど夫が皆生きながら来て、商業をして、労働をして皆夫自身に人生に於ける意義を生じて來る、今日世間を見る上此二様の見分けが全くつき居らぬ、教育の如きも若し此見地が開けず之に従事したなれば遂に學問を教ゆる器械たるに過ぎない、若し此見地が開け來りたるときは生きた人物を作るべき資格の具つたもので吉田兄の所謂教師の義務を理解し、體得したものである、

開話すること時あり、教授桑原隆藏氏出席せられ、歴史上の
一問題としてヨーロッパに於て東洋人によりて亞米利加
が発見されたりと云ふ説につきて詳細に其説の起源及び泰西
學者の主張など述べ且つ其論評など試みられたり、又教授葛
原信虎氏は自己の小兒時代修學時代より宗教に對する感想の
變化を叙して最後に宗教は人間必需のものなりや否やにつきて
各自が究明せられむこと望むと結はれたり、かくて時移り
たれば、團樂の間に晚餐を喫し、佐々木安五郎氏及びノルプ氏
の談話あり、佐々木氏は實地踏査の上蒙古人に對する氏の所
見を叙し、支那人は十分文明を理解して、頭腦を消耗し盡し
たる人種にして燃え盡したる石炭の灰燼と化したるが如し、

到底氣力あるものとなるべき氣込なし、蒙古人は猶燻ふり燃やし得べき褐炭の如し、今後大に誘導開發の見込ありとて、述へられ、ノルプ氏來朝せられたる來歴を話しノルプ氏は簡單に而も切實に信仰上の感話をせられたり、雜錄欄に載する如し、かくて興益々盡さず、十二分の歡晤を極め散會せり、

佛教青年會夏期講習會

大日本佛教青年會に於ては第十四回夏期講習會を昨年の如く不忍池辨天内に於て開會せり、會期は七月九日より十日間に於て其講師及講題を擧ぐれば左の如し、

- 晋時代の佛教 前田 慧雲
- 親鸞聖人 近角 常觀
- 佛最後の説法 境野 哲
- 禪海一瀾十則 釋 宗 演
- 予か宗教觀 村上 專精
- 法句經 南條 文雄
- 蘇東坡 大内 青巒

涼風荷葉を吹き、清蓮露に開く、京洛紅塵萬丈の裡、此清涼の別天地あり、況んや自然の徳風徐かに起り微かに動くに於てをや、八十の聽衆其心胸を開き來る幾許ぞ、會期中茶話會を開き期終りて後有志者相携へて富士登山の壯舉ありたり

夏季修養の好時機

回顧せば昨年本月の本誌、夏季の修養を論じて佛在世夏安居の制を回想したるが、今又其好時機に接するに至れり、然るに本年は軍國多事講習會の如きは例年に比して少かるべしと豫想せしに拘はらず、各地其企ある昨年に劣らず、蓋し是れ

益々求道の精神勃興し來るを示すもの、賀せずはあるべからず、八月中近角の出席すべき講習會は左の如し、

- ▲米澤佛教夏期講習會 八月一日より五日間、是れ一昨年來開催せる所、釋宗活師も出席の筈なり、汽車羽州に入りて山水清涼遠く俗塵を絶つ、清興想ふべし、
- ▲京都佛教青年會聯合夏期講習會 八月九日より一週間、是れ本年初めて開催せる所、求道の青年相集まりて眞摯法味を愛樂せんとするもの鳴河の清、以て心を洗ふ可き也、
- ▲信州飯山附近夏期修養會 八月二十日より八日間、是れ一昨年來有縁の地にして前號既に報ずる所、熱心なる有志者一團となりて親鸞聖人を鑽仰せむとす、不可思議の宿縁也、

求道會講話

例年は七八二月講話を休む例なりしが本年は七月中開會せること平常に異ならず、夏季清曉學舎に講話を開く、説く者、聽く者、一段の清淨の感を以て満たさる、又晩涼日本橋俱樂部に相會す亦清涼の別天地に遊ぶの想あり、九段佛教俱樂部に至りては恰も午後炎熱の時、而も欣々來會せらるゝを見れば亦暑を忘れずはあらず、八月中休會、九月に至りて第一第二第三皆再び開會、相共に道を求むべし

求道學舎日曜講話題

- 信前信後(六月十八日) 女子信仰談話會
- 無我の力(六月廿五日) 信仰談話會
- 明來闍去(七月二日) 女子信仰談話會
- 如說修行(七月九日)

如來は光明也(七月十六日) 其金も...
 信連開發(七月廿三日) 會の成り...
 ▲第二求道會土曜講話題
 光明の生活(六月十七日) 夏...
 一切無礙(六月廿四日) 秋...
 精進にして道を求めよ(七月一日) 富士...
 佛日普照(七月八日) 佛...
 慈悲世に滿つ(七月十五日) 佛...
 智慧如海(七月廿二日) 佛...
 ▲第三求道會講話題
 寶藏自到(六月廿四日) 佛...
 清涼の徳風(七月廿二日)

發行日を後らして申譯がありませぬ。皆様が非常に御待ち下さる御心持は十分御察申し且つ感佩して居りまするが、とかく、眼前にせまる傳道の方が先きになりて筆の方が後れて仕方ありません。夏季講習會中も旅行先で執筆して可成漸次期日に近づける事に致します、どうぞ暫く御容赦を願います。



天の御心... 御心持は十分御察申し且つ感佩して居りまするが、とかく、眼前にせまる傳道の方が先きになりて筆の方が後れて仕方ありません。夏季講習會中も旅行先で執筆して可成漸次期日に近づける事に致します、どうぞ暫く御容赦を願います。

求道會館設立喜捨金 受領報告(第九回)

- 金貳 圓也(即納) 岡山 越智英 代殿
 - 金壹 圓也(即納) 名古屋 龍山 眞殿
 - 金貳 圓也(即納) 東京 板橋盛 俊殿
 - 金壹 圓也(即納) 東京 它間 巖殿
 - 金壹 圓也(即納) 東京 無名 氏殿
 - 金貳 圓也(即納) 東京 無名 氏殿
 - 金拾 錢也(即納) 東京 中村ゆき子殿
 - 金五拾錢也(即納) 東京 藤本すゝ殿
 - 金貳 圓也(即納) 東京 某 子殿
- 小計拾壹圓六拾錢也

通計千百五拾五圓六拾八錢也

右御寄附を辱うし難有奉存候茲に謹んで感謝し奉り候也

泰文社發賣書籍一覽

日蓮聖人遺文全集

靈長閣藏版
 袖珍縮刷○總皮表紙帙造り
 金文字入り天地金類る美本
 (二方金は一冊貳圓拾二錢)
 正價 一冊 金貳圓
 執れも小包料拾五錢
 上人の遺文は「録内、録外」六十五卷「遺文録」三十卷其他の「別集」數十卷之を總計すれば百卷已上にて洪帙六冊の代價「廿有餘圓」にあらざれば捕へがたし然るを今回其全部を縮刷して一冊の小本と爲し携帶にも便利となり購求するに前記の大廉價にて得らるゝ様にし加ふるに目錄索引等周到綿密に行届き校正も嚴重にし全國を巡りて一々御眞筆に照校したる未曾有の出版なり御讀用はいふも更なりタトヒ讀まざるものにて御本尊實前の御備用として最適當の良書なり

妙行正軌

田中智學居士撰集... 師子王文庫發行
 ◎日本紙兩面懷中用刷折本
 ●經文・翻經・禪觀・禮讚式・回向文
 ●唱歌等信徒必要のもの悉網羅
 (一部十五錢、郵稅貳錢)

妙宗

師子王文庫發行誌籍發賣元 日宗新報社發行誌籍發賣元
 京都村上書林 關東代理店 靈長閣藏版一手特約發賣元
 師子王文庫發行誌籍發賣元 日宗新報社發行誌籍發賣元
 京都村上書林 關東代理店 靈長閣藏版一手特約發賣元

日本國の宗旨

此書の内容は既に天下の知る所早く十數版を累ねたり

末法の大導師

此書の内容は既に天下の知る所千餘萬部を賣盡したり

宗綱提要

此書の三書とも文章は平易にして論述最も痛快効卓絶なれば如何なる人にも之を讀めば百年の非を知りて靈の救を得ん乞ふ盛に讀み且つ施本せられよ

世界統一の天業

この三書とも文章は平易にして論述最も痛快効卓絶なれば如何なる人にも之を讀めば百年の非を知りて靈の救を得ん乞ふ盛に讀み且つ施本せられよ

東京 泰文社
 京橋南傳馬町二ノ六
 電話本局二九二番

無我の愛

第一卷 第一冊
郵税 不要

毎月二回 廿五日發行

●無我愛は、個人をして、直ちに、絶對的眞理、絶對的幸福、絶對的自由を得せしむるの道也。
●無我愛は、自己の運命を全く他の愛に任せ、同時に、全力を奮つて他を愛するの主義也。

●絶對の眞理

●國家の煩悶

●無我小感

●時映時 本領

●無我死諸兄へ

●偽善か、反省か

●無我の基督

●淺薄なる「時代思潮」

●蚊帳物語

●全國卒業生を迎ふ

●無我死生活

●誌界小言

●余が人生觀

●我利の聲

●「日曜通信」配付記事

●本寺本山を悲む歌

●靈の閃き

●質疑解答

●散文詩

時映時 本領
時浪逸民 評
時藤藤信 評
時どんぐり 評
時枯山、玄骨 評
時藤岡勝二 評
時親鸞聖人 評
時伊藤證信 評
時曉村 評

發行所

東京集鴨
六二二五

無我苑

月刊新佛教

創刊第六周年紀念號
賣價貳拾錢郵税貳錢

七月一日發行紀念號には

「來世の有無」

●七月一日發行紀念號には
●「來世の有無」
●七月一日發行紀念號には
●「來世の有無」
●七月一日發行紀念號には
●「來世の有無」

●七月一日發行紀念號には
●「來世の有無」
●七月一日發行紀念號には
●「來世の有無」
●七月一日發行紀念號には
●「來世の有無」

發行所

東京駒込片町十六番地

新佛教徒同志會

發賣所

東京市小石川區原町

鷄聲堂

戰時模範文範

佛敎青年協會編 『即時發送』



全一冊

正價郵税共金二十四錢(郵券代用一割増事)

●大好評噴々初版賣切れ二版製本出來す

發賣元

東京市麻布區
飯倉町五丁目

森江書店

求道學舎校訂

●歎異鈔

最新形美本

全一冊

正價金五錢
郵税金二錢

大内青巒居士演譯、安藤正純師和解

●淨土妙典二部經譯解

全一冊

正價金五十錢
郵税金十錢

文學士常盤大定、近角常觀、吉田賢龍共著

●釋迦史傳

全一冊

正價金卅五錢
郵税金六錢

加藤熊一郎君著

●大乘佛敎大綱

第五版

全一冊

正價金卅五錢
郵税金四錢

加藤熊一郎君著

●大乘佛敎百託

第六版

全一冊

正價金廿五錢
郵税金四錢

發兌元

東京市麻布區
飯倉町

森江書店

東京市本郷四丁目

文明堂

麗明對校
全部讀點

縮刷大藏經

全部完成

●全三百四十七冊。用紙美濃三萬四千七百四十八丁。正價金參百八拾七圓

一轉尙菩提を得るてふ一切經は戰死戰捷弔慰紀念の最上乘なり豫約の期に後れたる寺院の懇囑を諸し數部を増刊して特に月賦割引の便法を設け以て同感寺院の高需に應ず

大藏經募緣帖

正價金七拾五錢

市外は送料金(郵券代用諾)拾錢を要す

募緣帖は兩藏經と體裁を一にし初めに佛像を奉安し次に募緣の底文を記し毎丁寄付金及其姓名記入の欄を設け之に藏經購入の隨喜者助緣者等の氏名を記載し永く藏經と共に安置して深き固縁を示すの便に供す

靖國大日本續藏經

正價一帙 金七圓五十錢 豫約減價五圓

藏經以外の佛典を網羅し絶世の寶典たるを証す(本年五月より毎月一套宛凡三ヶ年間繼續豫約にて發行す)申込餘地數部あり機を逸する勿れ

●規約御入用の方は京都市油小路松原上ル十二番戸大藏經書院參錢郵券を送れ



前號要目

求道

◎人生の歸趣は佛天の御はからひ也

◎確信の行動

煩悶と確信

煩悶の兩面

源平時代の煩悶

鎌倉時代の確信

確信時代の曙光

信仰の確立

確信の行動

◎人格の陶冶

講話

◎絶對の地盤

◎佛陀の引接

實験

◎「羽村」其後の消息

清水甲子三郎

◎母の愛と佛陀

本谷 暢音

靈蹟

◎五臺山探勝記

菊池 秀言

曠詠

◎草庵の若菜

左 千 夫

◎植物園雜詠

甲之、常音

時報

◎求道學會紀念日◎清澤師三年忌◎夏期修養の期來る◎講話題等